

塚畠遺跡 V

— D地点の調査—

徳万谷附遺跡

2021

本庄市教育委員会

序

本庄市は、県内でも最古級の前方後方墳である県指定史跡 鷺山古墳をはじめ、原始・古代から近代に至るまでの数多くの遺跡と歴史的建造物に恵まれた地域です。

市内には旧石器時代から近世までの遺跡が500か所以上所在しますが、特に、古墳時代の遺跡の多いことが特徴として挙げられます。本市に分布する古墳の数も県下第2位を誇り、数多く発掘された形象埴輪のうちの1つ盾持人物埴輪は、本庄市マスコットにはぼんのモデルとなっています。また中世には、鎌倉時代に活躍した武士団の1つ児玉党の本拠地があり、さらに関東における戦国時代初期の激戦地となった五十子陣が築られました。

近世に至ると、中山道随一の宿場町と謳われた本庄宿が営まれ、様々な人とモノが行きかい、多くの文人が訪れました。埼玉三偉人の一人である盲目の国学者塙保己一も、ここ本庄市児玉町保木野の地に生まれました。近代には、養蚕の町としても広く知られ、県指定文化財 競進社模範蚕室は、日本の近代化を支えた養蚕技術の学び舎として群馬県の「富岡製糸場と絹産業遺産群」とともに近代化産業遺産として注目を浴びています。

さて、本書では塚島遺跡D地点と徳万谷附遺跡の発掘調査における成果を報告いたします。ここに報告する2遺跡は道路整備の計画上、やむを得ず発掘調査を行うこととなったものであります。発掘調査では、ともに古墳時代の集落の一端が明らかとなりましたが、塚島遺跡は本庄台地に、徳万谷附遺跡は丘陵上に位置するという立地環境の違いから、遺構の種類や歴史的背景の違いが見られました。

これらの遺跡の記録は、本書によって永く後世に残ることとなりますが、学術的な資料としてはもとより、市民の学びを通じて、地域の歴史に対する深い理解へと結びつききっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際し、ご協力やご教示を賜りました関係諸機関並びに地元関係者の皆様に対しまして、改めてお礼を申し上げます。

令和3年3月

本庄市教育委員会
教育長 勝山 勉

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町共栄字南共和330番地外に所在する塚島遺跡D地点(遺跡番号No. 54-028)、および埼玉県本庄市児玉町宮内字徳万谷附1400外に所在する徳万谷附遺跡(遺跡番号No. 54-106)の発掘調査報告書である。なお、塚島遺跡D地点は発掘当時、南共和遺跡(遺跡番号No. 54-029)を含んでいたが、平成17年7月に遺跡範囲の変更増補を行い、現在は塚島遺跡単独の遺跡となっている。

2. 塚島遺跡に関する発掘報告書は、これまでに『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』、『塚島遺跡Ⅱ』、『塚島遺跡Ⅲ』、『塚島遺跡Ⅳ』の4冊が刊行されている。本書は塚島遺跡の5冊目の報告書となることから『塚島遺跡Ⅴ』とした。また塚島遺跡は調査地点ごとに呼称が定められており、本書所収となる地点は塚島遺跡D地点と呼称する。

3. 発掘調査の目的・期間・調査機関・調査担当は、以下のとおりである。

塚島遺跡D地点

調査目的 町道改良舗装工事に伴う事前の記録保存

調査期間 平成2年7月28日～9月29日

調査機関 旧児玉町教育委員会

調査担当 鈴木徳雄、徳山寿樹

徳万谷附遺跡

調査目的 農道改良舗装工事に伴う事前の記録保存

調査期間 平成3年11月11日～平成4年1月28日

調査機関 旧児玉町教育委員会

調査担当 徳山寿樹

4. 発掘調査および整理・報告書刊行に要した経費は、町費(当時)・市費である。
5. 報告書刊行のための図面整理、周辺遺跡の作図等は松本完(平成28～令和元年度)が行い、本書の編集・執筆は大熊季広の協力のもと、福岡佑斗(令和2年度)が行った。
6. 塚島遺跡D地点の基準点等の測量は株式会社間正測量設計事務所(平成2年度)に委託し、出土遺物整理作業を有限会社毛野考古学研究所(平成28・29年度)に委託した。その他、図面編集業務等は本庄市教育委員会が行った。
7. 徳万谷附遺跡の基準点等の測量は井田起業株式会社(平成3年度)に委託し、出土遺物整理作業を有限会社毛野考古学研究所(平成28・30年度)に委託した。その他、図面編集業務等は本庄市教育委員会が行った。
8. 本書に関する出土品・図面・デジタルデータ等の資料は、本庄市教育委員会が管理・保管する。

9. 本報告にかかる発掘調査、整理作業および報告書編集・刊行に関する本庄市教育委員会の組織は下記のとおりであります。

塚島遺跡D地点発掘調査（平成2年度）				徳万谷附遺跡発掘調査（平成3年度）			
主体者	児玉町教育委員会			主体者	児玉町教育委員会		
	教育長	野口 敏雄			教育長	富丘 文雄	
事務局	社会教育課			事務局	社会教育課		
	課長	吉川	豊		課長	吉川	豊
	課長補佐	立花	勲		課長補佐	前川	由雄
	課長補佐	前川	由雄		社会教育係		
	主任	金子	幸弘		主任	金子	幸弘
	主事	渋谷	路子		主事	渋谷	路子
	主事	恋河内	昭彦		主事	恋河内	昭彦
担当者	主任	鈴木	徳雄	担当者	主任	鈴木	徳雄
	主事	徳山	寿樹		主事	徳山	寿樹
	調査員補	千袋	智		調査員補	尾内	俊彦
		尾内	俊彦				

塚島遺跡D地点・徳万谷附遺跡整理・報告書刊行組織（平成28年～令和2年度）

主体者	本庄市教育委員会		勝山	勉（平成28～令和2年度）
事務局	事務局長		稲田	幸也（平成28～30年度）
	次長		高橋	利征（令和元～2年度）
	文化財保護課		山田	由幸（平成28年度）
	課長		杉原	初（平成28～29年度）
	課長補佐		佐々木	智恵（平成30～令和2年度）
	課長補佐兼埋蔵文化財係長		細野	房保（令和2年度）
	埋蔵文化財係長		太田	博之（平成28年度）
	主任		恋河内	昭彦（平成29～令和元年度）
	主査		大熊	季広（令和2年度）
	主任		恋河内	昭彦（平成28年度）
	主事		松本	完（平成28～29年度）
	主事補		徳山	寿樹（平成28～30年度）
	会計年度任用職員		塩原	浩（平成29～令和元年度）
	専門員		的野	善行（平成28～令和2年度）
	臨時職員		水野	真那（令和2年度）
			水野	真那（令和元年度）
			福岡	佑斗（令和2年度）
			中嶋	淳子、矢内 勲、新井 嘉人、落合智恵美、
			倉林	美紀、栗原 正実、黒沢 恵、渋谷 裕子
			星野	八重子（令和2年度）
			松本	完（平成30～令和元年度）
			徳山	寿樹（令和2年度）
			中嶋	淳子（平成28～令和元年度）

10. 発掘調査及び本書作成にあたって、下記の方々や諸調査機関よりご助言ご協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

池田 匡彦、伊藤 寛、井上 裕一、金子 彰男、北山 直人、小林 茂仁、中沢 良一、林 道義、春山 綾子、引田 直樹、丸山 修、丸山 陽一、有限会社毛野考古学研究所、児玉郡神川町教育委員会、児玉郡上里町教育委員会、児玉郡美里町教育委員会、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、早稲田大学考古資料館

凡 例

- ・塚島遺跡D地点整理の遺構番号は、本報告書を作成するにあたり、A地点からの通し番号と整合させたため、整理時に新たに遺構番号を振り直している。なお、第51号住居跡の切り合いについて、これまでのC～F地点全景図で番号が逆転していたため、合わせて修正した。

旧番号	新番号	旧番号	新番号
第1号住居跡	第49号住居跡	第5b号住居跡	第54号住居跡
第2a号住居跡	第50a号住居跡	第1号掘立柱建物跡	第2号掘立柱建物跡
第2b号住居跡	第50b号住居跡	第1号土坑	第14号土坑
第3a号住居跡	第51b号住居跡	第3a号住居内土坑	第58号土坑
第3b号住居跡	第51a号住居跡	第1号溝跡	第4号溝跡
第4号住居跡	第52号住居跡	第2号溝跡	第5号溝跡
第5a号住居跡	第53号住居跡	中世堅穴状遺構	第1号方形堅穴状遺構

- ・本書所収の塚島遺跡C～F地点全測図・各測量図・各遺構図における方位針は座標北を示している。
- ・第3・4・29図中のXY座標値は、平面直角座標第IX系の座標値を示し、単位はmである。セクション図に使用した数値は標高を示し、単位はmである。
- ・遺構には次の略号を使用した。
SI=堅穴住居跡 SB=掘立柱建物跡 SD=溝跡 SK=土坑 SF=方形堅穴状遺構 P=ピット
- ・遺構実測図は、塚島遺跡D地点全測図を1/400、徳万谷附遺跡全測図を1/700、住居跡カマド・貯蔵穴の平面図・断面図は1/30、その他の遺構平面図・断面図を1/60で掲載した。
- ・遺構の規模は、上端での計測値を原則としている。
- ・遺物観察表における各項目の内容は以下のとおりである。
A-法量（単位はcmまたはgとする。カッコ内は推定値を示す）、B-成形、C-整形・調整、D-胎土・材質、E-色調、F-残存度、G-備考、H-出土位置（現場取り上げ番号等）
- ・遺構断面図中のスクリーントーンは、それぞれの地山を示す。
- ・遺物の実測図および写真の縮尺は1/4で掲載した。ただし、塚島遺跡D地点 第51a号住居跡出土遺物No.11支脚、徳万谷附遺跡遺構外遺物No.4石器の実測図および写真は1/3で掲載した。
- ・本報告書で使用した地図は下記のとおりである。
国土交通省国土地理院 1/50,000 「高崎」(平成10年度)
- ・発掘調査報告書などの引用文献は文中では明示せず、第V章末にシリーズ毎にまとめて掲載した。

目次

序	
例言	
凡例	
目次	
第I章	発掘調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第1節	塚島遺跡D地点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第2節	徳万谷附遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第II章	遺跡の地理的・歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第1節	地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第2節	歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第III章	塚島遺跡D地点の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第1節	遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第2節	基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第3節	検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第IV章	徳万谷附遺跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第1節	遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第2節	基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第3節	検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第V章	まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第1節	塚島遺跡D地点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第2節	徳万谷附遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
<参考文献>	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
写真図版	
報告書抄録	

第1章 調査に至る経緯

第1節 塚島遺跡D地点

本報告に関わる発掘調査は、平成2年度の町道改良舗装工事に先立つ埋蔵文化財保存事業として実施したものである。

開発予定地は、『埼玉県遺跡地図』に記載された周知の埋蔵文化財包蔵地である塚島遺跡(No. 54-028)および南共和遺跡(No. 54-029)の範囲内(当時)に位置していたことから、慎重に協議が進められており、旧児玉町教育委員会による試掘調査では多数の遺構・遺物が検出されていた。そのため、本開発により埋蔵文化財に影響が及ぶと考えられる部分については、事前に記録保存の措置をとることとなった。

発掘を実施するにあたっては、平成2年7月23日に児玉町長 小柏儀一より、文化財保護法第57条の3第1項、同98条第2項(当時)の規定による「埋蔵文化財発掘の通知について」が児玉町教育委員会(当時)に提出されたので、同日付で埼玉県教育委員会に到達した。これに対して埼玉県教育委員会からは平成3年3月29日付け教文第3-345号による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」が児玉町教育委員会教育長に通知され、発掘調査は文化財保護法の趣旨を尊重し、慎重に実施するように指示された。

なお、塚島遺跡D地点の発掘調査は、平成2年7月28日～9月29日の約2カ月の期間を要して実施された。当時は、遺跡を塚島遺跡及び南共和遺跡として調査が実施されているが、平成17年7月29日付児教社第73号及び74号「埼玉県埋蔵文化財包蔵地カード(変更増補)」が児玉町教育委員会より埼玉県教育委員会に提出され、現在は塚島遺跡に統一されている。

第2節 徳万谷附遺跡

本報告に関わる発掘調査は、平成3年度の農道改良舗装工事に先立つ埋蔵文化財保存事業として実施したものである。

開発予定地は、『埼玉県遺跡地図』に記載された周知の埋蔵文化財包蔵地である徳万谷附遺跡(No. 54-106)に位置していたことから、慎重に協議が進められており、旧児玉町教育委員会による試掘調査では多数の遺構・遺物が検出されていた。そのため、本開発により埋蔵文化財に影響が及ぶと考えられる部分については、事前に記録保存の措置をとることとなった。

発掘を実施するにあたっては、平成3年10月3日に児玉町長 小柏儀一より、文化財保護法第57条の3第1項、同98条第2項(当時)の規定による「埋蔵文化財発掘の通知について」が児玉町教育委員会(当時)に提出されたので、同日付で埼玉県教育委員会に到達した。これに対して埼玉県教育委員会からは平成4年1月6日付け教文第3-315号による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」が児玉町教育委員会教育長に通知され、発掘調査は文化財保護法の趣旨を尊重し、慎重に実施するように指示された。

なお、発掘調査は、平成3年11月11日～平成4年1月28日の約3か月の期間を要して実施された。

(本庄市教育委員会文化財保護課)

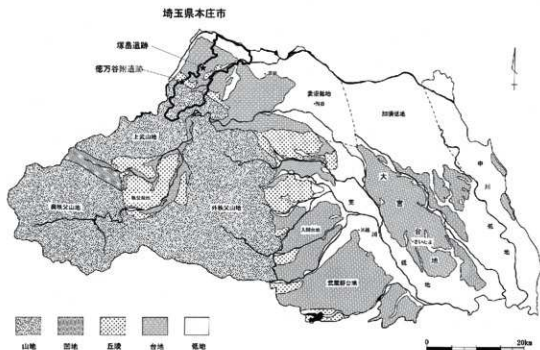
第II章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

本書で報告する塚島遺跡及び徳万谷附遺跡の所在する本庄市は、埼玉県北西部に位置し、北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市と、東側は深谷市及び児玉郡美里町と、南側は秩父郡皆野町及び長瀨町と、西側は児玉郡神川町と、北西側は児玉郡上里町とそれぞれ接している。また、平成18年に旧本庄市と旧児玉町が合併して現在の本庄市となった。市域は北東端を利根川とし、南西端を上武山地とする北東端～南西端まで約20kmである。

本庄市の地形は、南西部の山地および丘陵、市内中央部にあたる児玉市街地から本庄市街地にかけての台地、北東部の利根川右岸に展開する低地からなる。南西部は秩父山系の北東部を形成する上武山地の裾付近に相当する。上武山地は三波川変成帯の結晶片岩を基盤とし、断層線である八王子-高崎構造線によって裾部から北東方向に半島状に延びる児玉丘陵と区分される。児玉丘陵は標高を100～180mとする河川の浸食により細分された複数の小支丘群からなり、小支丘間には湧水による細長い小谷が発達している。この丘陵からは、第三系の独立丘である生野山丘陵、大久保山丘陵が北東方向に列点状に延びている。

市内中央部は埼玉県と群馬県の県境をなす神流川の神流川扇状地と前述の独立丘東側を流れる小山川（旧身馴川）の身馴川扇状地の複合地形であり、本庄台地と呼称される。台地上には複数の中小河川が流下している。また、台地北端部は児玉郡上里町金久保付近から本庄市鶴森にかけて段丘崖（断層崖）が形成されており、この崖地形を隔てて、利根川右岸の低地と接している。北東部の低地は、利根川や烏川の氾濫原であり、自然堤防の発達が顕著で、下流の妻沼低地、加須低地へと連続している。



第1図 埼玉県の地形

本書所収の塚島遺跡は、JR八高線児玉駅より北に約2.6km、関越自動車道本庄・児玉インターチェンジから南西に約2.8km、現在の児玉工業団地南東部に位置する。周辺の地形としては概ね平坦で緩やかに北東向きに下がる本庄台地面の縁辺部に所在している。また、東側は女堀川左岸の水田地帯になっており、大規模な条里遺跡である児玉条里が所在している。

徳万谷附遺跡は、JR八高線児玉駅より西に約3.3km、関越自動車道本庄・児玉インターチェンジから南西に約7.0km、児玉郡神川町との市町境に位置する。周辺の地形としては、西側の児玉丘陵から葉脈状に分岐した一支丘の南縁辺部に所在しており、標高は120m程度で、この支丘の平坦部は北側の児玉郡神川町側にある。また、南側の緩やかな谷を挟んだ対岸の小支丘下には、女堀川が流下している。

第2節 歴史的環境

本書所収の2遺跡は、女堀川流域の歴史的な影響を強く受けた遺跡である。女堀川は上武山地内に源を發し、児玉町宮内を抜け、中流域で生野山丘陵、大久保山丘陵といった独立丘の北西側を通り、東五十子を抜け、本庄市と深谷市の市境近くで小山川と合流する河川であり、兩岸には多くの遺跡が分布する。本節では2遺跡の立地する女堀川上・中流域の歴史について、低地から丘陵にかけて開発の進む古墳時代から平安時代までを前史に当たる弥生時代から概観する。

まず、弥生時代において、女堀川流域では全体に遺跡が少ない傾向にあった。とりわけ、中・下流域での遺構・遺物の検出は少なく、弥生時代の遺跡は主に上流域の丘陵部側に立地する。

各時期を概観すると、前期には竈穴住居跡が見られず、四方田遺跡(27)等で土坑群や土器片の検出がある程度である。中期には低地部から丘陵部にかけて遺跡が立地し、今井条里遺跡(26)、四方田遺跡(27)、飯玉東遺跡(30)等で遺構が検出されている。

後期には丘陵部や独立丘上に遺跡が立地しており、飯玉東遺跡(30)、生野山遺跡(49)、塩谷平氏ノ宮遺跡(73)、真鏡寺後遺跡(85)、下原北遺跡(86)、前組羽根倉遺跡(95)等で遺構・遺物が検出されている。この時期の集落の多くは立地環境や検出状況から、比較的小規模な谷田経営を基盤とする小規模なものであったと考えられている(恋河内1992)。また、この時期に検出される土器には、吉ヶ谷式、樽式、二軒屋式の3系統の土器が、互いに分布域を重複しながら出土するという特徴があり、社会の変化を考える上で重要な意味をもつ。墓域としては中期から後期にかけて、塩谷下大塚遺跡(72)、前組羽倉遺跡(95)等において再葬墓や方形周溝墓が検出されている。

古墳時代に入ると女堀川流域の低地開発が本格化する。女堀川では下流域の自然堤防・微高地、大久保山丘陵下の低地部を中心に開発が進み、次第に中流域、上流域に開発が進む傾向にある。新たに開発された地域には、在地系の土器の他に、畿内・東海・北陸・南関東等の外来系の土器が出土し、開発に伴う新たな技術や文物を携えた集団の流入が認められる。

一方で、上流域の丘陵部では引き続き、弥生時代後期の耕地や墓域等を継承する形で一定の区画内に集落を展開する傾向を示す(鈴木2000)。

前期における中流域の代表的な遺跡としては、大規模集落である後張遺跡(29)があり、川越田遺跡(31)、東牧西遺跡(34)、浅見境北遺跡(36)等、周辺に中小規模の集落が展開する。また、独立丘陵上には墓域が形成され、生野山丘陵や大久保山丘陵に方形周溝墓、鷺山丘陵に最大長60m級の前方後方墳である鷺山古墳(38)が築造される。以降、古墳時代を通して集落の後背地や丘陵部は墓域として利

用されていく。一方で、上流域では前述したように弥生時代後期の集落域が継続されつつ、やや広がりを見せる。丘陵部に倉林後遺跡(67)、塩谷平氏ノ宮遺跡(73)、神明前遺跡(77)、宮内上ノ原遺跡(88)、新羽根倉遺跡(94)、前組羽根倉遺跡(95)、丘陵下に塩谷下大塚遺跡(72)、十二天遺跡(79)、ミカド西遺跡(84)等で遺構・遺物が確認されている。

中期から後期にかけて、女堀川流域の低地開発が最盛期を迎える。前期の集落が継続する他、中期から開始する集落が展開し、集落の規模も拡大する。独立丘下の低地部や女堀川左岸の本庄台地縁辺部にも集落が拡散し、各地で灌漑のための中小規模の溝が検出されている。

中期の中流域の遺跡としては、前期から継続する後張遺跡(29)の他に、辻堂遺跡(47)、南街道遺跡(48)等でもやや規模の大きい集落が見つまっている。他の集落として、平塚遺跡(14)、古井戸遺跡(15)、堀向遺跡(19)、藤塚遺跡(20)、柿島遺跡(21)、今井条里遺跡(26)、四方田遺跡(27)、飯玉東遺跡(30)、川越田遺跡(31)、梅沢遺跡(32)、今井川越田遺跡(33)、東牧西分遺跡(34)、蛭川坊田遺跡(46)、樋之口遺跡(107)、将監塚遺跡(第3次調査地点)(17)等があり、各地で水路の痕跡が認められる。また、第2図の外ではあるが、この時期の代表的な遺跡に、中流域の夏目遺跡・夏目西遺跡があり、カマドの導入が進む中で、畿内系・朝鮮半島系の在産土器や鍛冶関連・玉作関連の遺物も認められており、新たな技術の積極的な導入の様相を知れる重要な遺跡となっている。この時期の古墳としては、生野山丘陵上に円墳である金鑽神社古墳(44)や生野山將軍塚古墳等が築造されている。また、上流域には倉林後遺跡(67)、枇杷橋遺跡(69)、塩谷下大塚遺跡(72)、真鏡寺後遺跡(85)等がある。

後期になると、集落は流域全体に拡散し、本庄台地上や丘陵部への開発も進む。金佐奈遺跡(9)、川越田遺跡(31)や今井川越田遺跡(33)、共和小学校校庭遺跡(41)、ミカド遺跡(83)等で大規模な集落が見つまっている。また他の遺跡としては中流域で、辻ノ内遺跡(5)、左口遺跡(13)、藤塚遺跡(20)、柿島遺跡(21)、飯玉東遺跡(30)、鷺山南遺跡(37)、辻堂遺跡(47)、南街道遺跡(48)、上流域で倉林後遺跡(67)、念仏塚遺跡(71)、塩谷下大塚遺跡(72)、下原北遺跡(86)、下原南遺跡(87)、真鏡寺後遺跡(85)等がある。また、生野山鏡子塚古墳等で前方後円墳が採用されるようになる他、後期を通して集落の後背地、独立丘や丘陵部に、多数の小円墳からなる塚本山古墳群(A)、生野山古墳群(B)、長沖古墳群(D)等の大規模な古墳群が形成される。

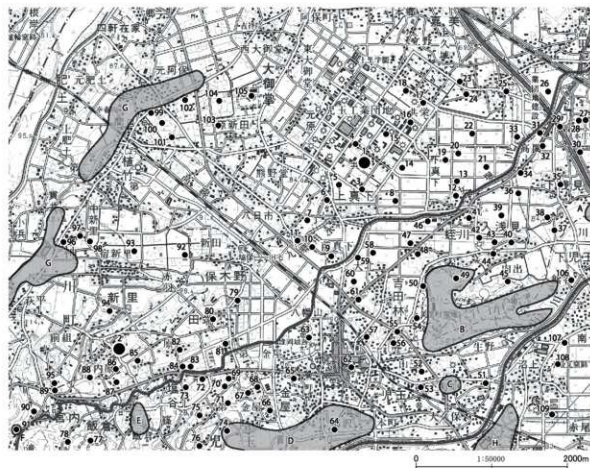
7世紀中頃になると、女堀川流域では集落の大規模な再編成が行われるようになる。東牧西分遺跡(34)等一部の集落を除き、中流域の自然堤防や微高地に立地した多くの集落は廃絶・移転し、本庄台地の縁辺部や独立丘陵下の低地部に集落が形成される。

中流域では、8世紀初頭までに「古九郷用水」や「真下大溝」が開削され(岩瀬1988,鈴木1989a,1989b)、児玉条里等の各地の条里が整備されていく。この時期の集落としては、南共和遺跡(4)、辻ノ内遺跡(5)、真下境東遺跡(6)、真下境西遺跡(7)、将監塚遺跡(16)、堀向遺跡(19)等があるが、とりわけ、将監塚遺跡は前述の大規模灌漑用水と相互的な関係性をもつ「計画的村落」として注目される(鈴木1991,1997)。また、上流域でも、十二天遺跡(79)にて大溝が検出されており、条里を望む丘陵の縁辺部に集落が形成される。

平安時代の9世紀後半になると、条里制の影響が弱まり、条里施行範囲の外にも集落が拡散する。台地縁辺部に立地していた集落は縮小し、低地の自然堤防上にも小規模な集落が広がりを見せるようになる。また、10世紀頃には各地の大溝が荒廃・埋没し、集落の再編成が進む。主な遺跡として、浅

見境遺跡(36)、鷺山南遺跡(37)、新屋敷遺跡(40)、吉田林割山遺跡(50)、阿知越遺跡(54)、ミカド遺跡(83)、ミカド西遺跡(84)、十二天遺跡(79)等がある。

11世紀に入ると生活様式の変化から、堅穴住居が極端に減少していく。11世紀末頃には、蛭川坊田遺跡(46)で直線的な溝で区画された掘立柱建物と堅穴住居跡、柵列、土坑等で構成された屋敷地が出現し、以降、次第に中世の集落構造へと推移していく。



第2図 塚島遺跡・徳万谷附遺跡の位置と周辺の遺跡

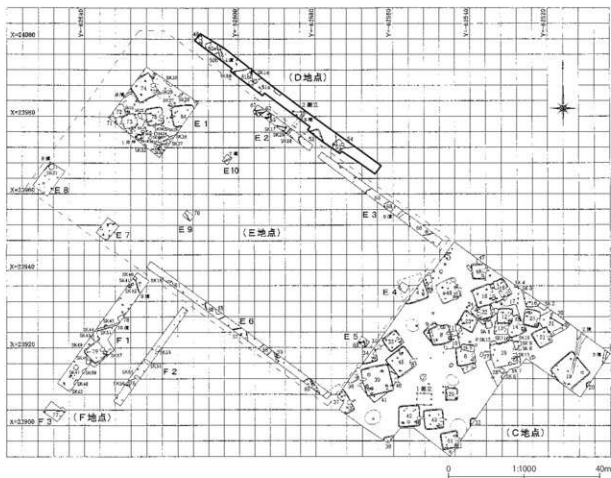
1. 塚島 2. 徳万谷附 3. 新宮 4. 南共和 5. 辻ノ内 6. 真下境東 7. 真下境西 8. 中下田 9. 金佐奈 10. 反り町 11. 八荒神 12. 中野 13. 左口 14. 平塚 15. 古井戸 16. 将監塚 17. 将監塚(第3次) 18. 将監塚B 19. 堀向 20. 藤塚 21. 柿島 22. 前田甲 23. 今井遺跡群 24. 今井原屋敷 25. 北廓 26. 今井条里 27. 四方田 28. 四方田古墳 29. 後張 30. 飯玉東 31. 川越田 32. 梅沢 33. 今井川越田 34. 東牧西分 35. 天神耕地・中畑 36. 浅見塚北 37. 鷺山南 38. 鷺山古墳 39. 東田 40. 新屋敷 41. 共和小学校校庭 42. 日延 43. 城の内 44. 金鑽神社古墳 45. 向田A 46. 蛭川坊田 47. 辻堂 48. 南街道 49. 生野山 50. 吉田林割山 51. 児玉大久保 52. 児玉清水 53. 児玉大太白 54. 阿知越 55. 御林下 56. 山王山 57. 女池 58. 鶴崎 59. 極越 60. 高縄田 61. 児玉条里堂ノ下 62. 児玉仲町 63. 八幡山壇輪楽跡 64. 賀家ノ上 65. 金屋北原 66. 倉林東 67. 倉林後 68. 金屋池脇 69. 枇杷橋 70. 下別所 71. 念仏塚 72. 塩谷下大塚 73. 塩谷平氏ノ宮 74. 長沖梅原 75. 観音山 76. 葦池 77. 神明前 78. 山崎上ノ南 79. 十二天 80. 田端中原 81. 田端南堂 82. 横尾後 83. ミカド 84. ミカド西 85. 真鏡寺後 86. 下原北 87. 下原南 88. 宮内ノ上 89. 羽根倉南 90. 天田 91. 脊戸谷 92. 保木野塚 93. 中北原 94. 新羽根倉 95. 前組羽根倉 96. 精進場 97. 中道 98. 西北原 99. 北原 100. 光権寺 101. 観音院南 102. 久保宿 103. 金屋 104. 中原 105. 白樹原・櫛下 106. 宮ヶ谷戸 107. 極之口 108. 水殿瓦楽跡 109. 宮下 A. 塚本山古墳 B. 生野山古墳群 C. 下町古墳群 D. 長沖古墳群 E. 飯倉古墳群 F. 宮内古墳群 G. 青柳古墳群 H. 広木大町古墳群 ※7・92～105・Gは児玉郡神川町、106～109・A・Bの一部、Hは児玉郡美里町の遺跡。

第三章 塚島遺跡D地点の調査

第1節 遺跡の概要

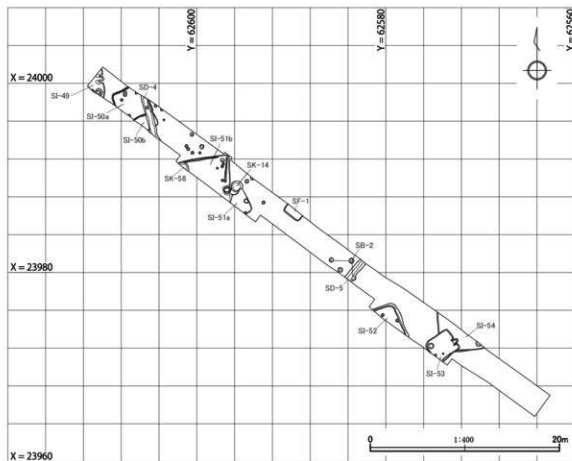
本遺跡は、女堀川中流域左岸の標高80mを測る本庄台地の縁辺部に立地し、古墳時代前期～後期の集落跡と中世の屋敷地を主体とする複合遺跡である。本遺跡の発掘調査は、昭和62年に県営ほ場整備事業児玉北部地区の小排水路建設に伴うA地点（大屋1991）の調査に始まり、同年に町道改良（外周道路）拡幅舗装工事に伴うB地点、平成元年に民間の工場と事務所建設に伴うC地点（恋河内2012）、平成2年に町道改良舗装工事に伴うD地点、平成15年に民間の倉庫と事務所建設に伴うE地点（恋河内2008b）、平成16年に民間の倉庫建設に伴うF地点（恋河内2008a）の調査がそれぞれ実施されており、本書所収のD地点調査は、本遺跡の第4次調査にあたる。

D地点の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡1軒、土坑2基、溝跡2条、方形竪穴状遺構1基である。竪穴住居跡は、調査区の関係から部分的な発掘となり、形態等が分かるものは第53号住居跡のみである。第49・51b・53・54号住居跡ではカマドが検出されており、住居の向きは本遺跡で一般的な北東～東をとる。住居規模の判明している第53号住居跡は3m程度と小型の住居に区分される。住居跡からの出土物は古墳時代後期と推定される土師器が多く、本調査区域は古墳時代後期を中心とした集落域と考えられる。他の遺構は、共存する遺物がない、または少ないため、



第3図 塚島遺跡C～F地点全体図

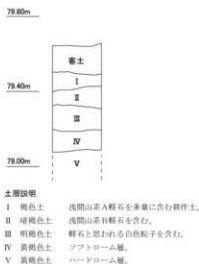
性格や時期の決め手に欠けるが、掘立柱住居跡は出土した遺物から奈良時代の可能性があり、土坑は第58号土坑が覆土の状態から平安時代以前、溝跡は覆土の状態から主に近世以降の所産とそれぞれ推定される。また、第1号方形竪穴状遺構は、遺構の構造や形態及び覆土の状況から、中世の所産であると思われる。



第4図 塚島遺跡D地点全測図

第2節 基本層序

今回の調査では第49～54号住居跡の調査区壁面をもとに基本層序の観察を行っている。なお、右図は調査区北西の南西壁で観察されたものを掲載している。調査区北西から南東にかけて自然地形は、緩やかに傾斜し、調査区南東部では北西部に対し、20cm程度低い。本調査区の表土は、道路舗装に伴う客土で、道路砂利である。I層は浅間山系A軽石（天明3年：1783年）を多量に含む耕作土である。一部に、浅間山系A軽石を純層状に含むI'層がある。II層は浅間山系B軽石（天仁元年：1108年）を含む層である。III層は軽石と思われる白色粒子を含む層である。一部に、III層同様に白色粒子を含むがIII層よりやや暗いIII'層がある。IV層はソフトローム層、V層はハードローム層である。



第5図 塚島遺跡D地点基本層序概略図

第3節 検出された遺構と遺物

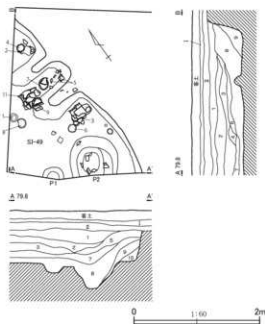
1. 竪穴住居跡

第49号住居跡（第6～8図、写真図版2・5）

調査区の北西端に位置する。住居跡の4/5が調査区外のため、遺構の全容は不明である。規模は、東西方向が1.83m、南北方向が3.18mを測る。住居の主軸方位は、N-85°-Eをとる。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは52cmである。ピットはP1、P2の2箇所が検出されている。P1は、直径35cmの円形を呈し、床面からの深さは16.5cmである。P2は、貯蔵穴で、カマド右側の住居南東部に位置する。規模は、南西部が調査区外であるが上端が幅44cm×37.8cm、下端が幅23cm×13.4cmを測る。平面形は楕円形を呈し、南東側がやや顕著な段をもつ形態をしている。床面から最深部までの深さは50cmである。

カマドは、住居東壁に位置し、壁に対して直角に付設されている。規模は最大長102.5cm・最大幅101.5cmである。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁に一致する。燃焼面（火床）は、住居の床面よりやや低く掘り下げられており、ほぼ平坦で水平に作られている。袖は、地山掘り残しの可能性があるローム土を主体とする黄褐色土を基部にして、その上にローム主体の粘土を貼り足して整形している。

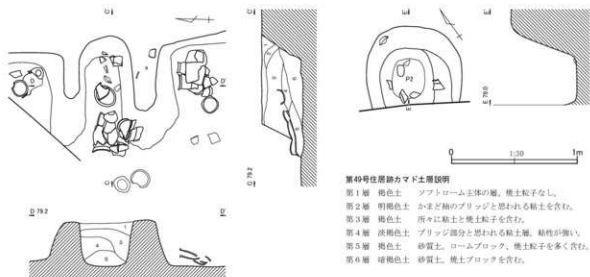
出土遺物は、カマド内や貯蔵穴（P2）、壁際の床面上から、比較的多く出土している。カマド内からは甕が2～3個体出土しており、カマド両袖脇からは鬼高期の坏と甕を主体とする土師器片がまとめられた状態で多量に出土している。本住居跡の時期は、覆土の状態や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第49号住居跡土層説明

- 第1層 褐色土 ローム粒子を底状に含み、白色粒子も含む。
- 第2層 明黒褐色土 1層に似るが、黒色土を底状に含まれる。白色粒子、焼土粒子、炭化物も含む。
- 第3層 明褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 第4層 明黒褐色土 2層に似るが、2層より大きな白色粒子を含む。ザラザラしている。
- 第5層 褐色土 ローム粒子を所々に含む。1層に似るが、白色粒子が少なく、ザラザラせず緻質。
- 第6層 明褐色土 ローム粒子、焼土粒子を底状に多く含む。下層部に粘土層を伴う。
- 第7層 褐色土 ロームブロックを底状に含む。ローム粒子、炭化物、白色粒子も含む。
- 第8層 褐色土 ローム粒子、炭化物粒子を含む。7層より細く緻質。
- 第9層 明褐色土 褐色土中に黒色土を底状に含む。ローム粒子も含む。
- 第10層 黄褐色土 ロームブロックを主体とする層。

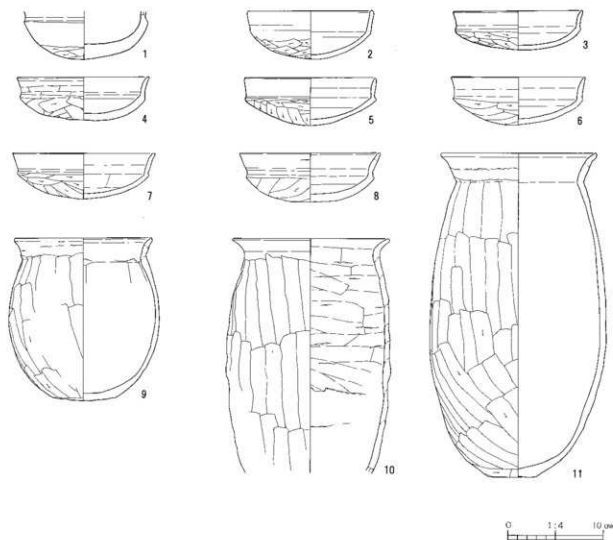
第6図 第49号住居跡平面・断面図



第49号住居跡カマド土層説明

- 第1層 褐色土 フットルーム主体の層。焼土粒子なし。
- 第2層 明褐色土 かまど軸のブリッジと思われる粘土を含む。
- 第3層 褐色土 西々に粘土と焼土粒子を含む。
- 第4層 淡褐色土 ブリッジ部分と思われる粘土層。粘性が強い。
- 第5層 褐色土 砂質土。ロームブロック、焼土粒子を多く含む。
- 第6層 暗褐色土 砂質土。焼土ブロックを含む。

第7図 第49号住居跡カマド・貯蔵穴平面・断面図



第8図 第49号住居跡出土遺物

第1表 第49号住居跡出土土物観察表

1	土師器 坏	B. 粘土組織み上げ。C. 外一縁部ヨコナデ。体部ナデ。体部下位～底部ケズリ。内一器面摩耗のため調整不明。D. 石英、白色粒、黒色粒。E. 外一にぶい褐色。内一褐色。F. 口縁部下平～底部。H. №15。
2	土師器 坏	A. 口縁部径13.5。器高5.1。B. 粘土組織み上げ。C. 外一縁部ヨコナデ。体部ナデ。体部下位～底部ヘラケズリ。内一縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラナデ。D. 白色粒、角閃石、雲母、礫。E. 内外面一褐色。F. 3/5。H. №17。
3	土師器 坏	A. 口縁部径13.7。器高3.1。B. 粘土組織み上げ。C. 外一縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内一縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。D. 白色粒、黒色粒、礫。E. 内外面一褐色。F. 3/5。H. №35, 37。
4	土師器 坏	A. 口縁部径13.9。器高4.6。B. 粘土組織み上げ。C. 外一縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。内一縁部ヨコナデ。体部～底部踏ナデ。D. 石英、雲母、白色粒、黒色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 口縁部1/3欠損。H. №16。
5	土師器 坏	A. 口縁部径(14.0)。器高5.1。B. 粘土組織み上げ。C. 外一縁部ヨコナデ。体部上位ナデ。体部中位～底部ヘラケズリ。内一縁部～体部ヨコナデ。底部ヘラナデ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外一褐色。F. 1/3。H. №25, 29。
6	土師器 坏	A. 口縁部径14.1。器高5.1。B. 粘土組織み上げ。C. 外一縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。内一縁部ヨコナデ。体部～底部踏ナデ。D. 石英、雲母、白色粒、黒色粒。E. 内外一明赤褐色。F. ほぼ完形。H. №11。
7	土師器 坏	A. 口縁部径15.0。器高4.8。B. 粘土組織み上げ。C. 外一縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。内一縁部ヨコナデ。体部～底部踏ナデ。D. 石英、白色粒、黒色粒。E. 内外一明赤褐色。F. 完形。H. №32。
8	土師器 坏	A. 口縁部径14.9。器高5.2。B. 粘土組織み上げ。C. 外一縁部ヨコナデ。体部～底部ケズリ。内一縁部～体部ヨコナデ。底部踏ナデ。D. 石英、片岩、白色粒。E. 内外一褐色。F. ほぼ完形。H. №14。
9	土師器 小形壺	A. 口縁部径(14.4)。器高17.1。底部径6.5。B. 粘土組織み上げ。C. 外一縁部ヨコナデ。胴部～底部ケズリ。内一縁部ヨコナデ。胴部～底部踏ナデ。D. 石英、チャート、白色粒、黒色粒。E. 内外一褐色。F. 胴部一部欠損。H. №33。
10	土師器 壺	A. 口縁部径16.6。B. 粘土組織み上げ。C. 外一縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。内一縁部ヨコナデ。胴部踏ナデ。D. 石英、チャート、白色粒、褐色粒。E. 外一にぶい黄褐色。内一褐色。F. 口縁部～胴部。H. №22。一坯。
11	土師器 壺	A. 口縁部径16.4。器高34.3。底部径5.0。B. 粘土組織み上げ。C. 外一縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。底部本葉痕の後ナデ。内一縁部ヨコナデ。胴部～底部踏ナデ。D. 石英、白色粒、褐色粒。E. 内外一褐色。F. ほぼ完形。H. №34。一坯。

第50a号住居跡（第9図、写真図版2）

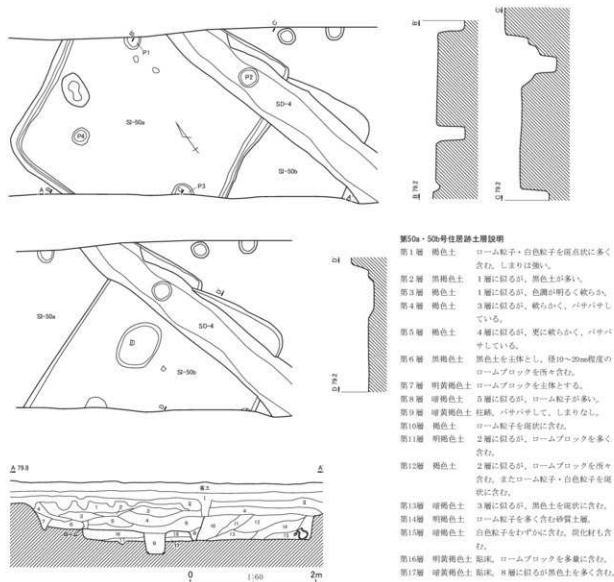
調査区の北西側に位置し、重複する第50b号住居跡を切り、住居跡東壁部を第4号溝跡に切られている。平面形は、コーナー部が丸みを持つ比較的整った方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3.4m、北西～南東方向が3.47mを測る。住居の主軸方位は不明であるが、住居の北西側壁はN-65°-Eの方位をとる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは42.6cmである。残存する各壁下には、北面で幅10cm・深さ6cm、南面で幅15cm・深さ14cm程度の壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む明黄褐色土を埋め戻した貼床である。ピットはP1～P4の4箇所が検出されており、P1～P4はほぼ住居の対角線上に配置されていることから4本主柱穴を構成するものと考えられる。25cm～36cmの円形または楕円形状を呈する形態で、床面からの深さは45cm～55cmである。

出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、覆土の状態や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。

第50b号住居跡（第9図、写真図版2）

調査区の北西側に位置し、重複する第50a号住居跡に北半を切られ、東側を第4号溝跡に切られている。平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ長方形または歪な方形を呈しているものと考えられる。規模は、北東～南西方向は3.1m、北西～南東方向が2.96mを測る。住居の主軸方位は不明であるが、住居の北西側壁はN-70°-Eの方位をとる。壁は、直線的に立ち上がり、確認面からの深さは40.6cmである。床面は、第50a号住居跡との重複部分のみロームブロックを含む明黄褐色土で補強している。

出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、覆土の状態や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。

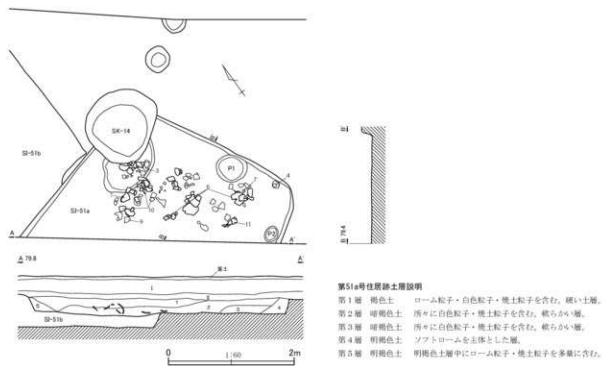


第9図 第50a・50b号住居跡平面・断面図

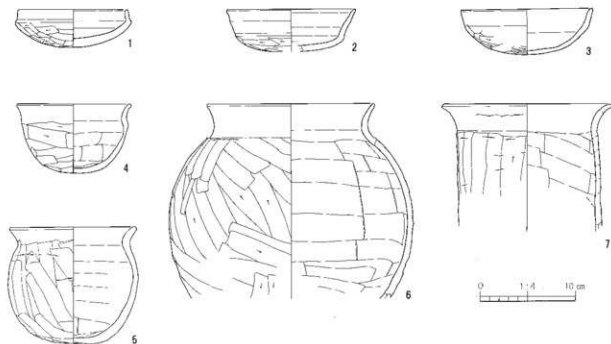
第51a号住居跡 (第10～12図、写真図版3・6)

調査区北側に位置し、重複する第14号土坑に切られ、第51b号住居跡を切る。住居跡の1/2が調査区外のため、遺構の全容は不明である。平面形は調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ長方形または歪な方形を呈しているものと考えられる。規模は、北東～南西方向が3m、北西～南東方向が2.6mを測る。住居の主軸方位は不明であるが、住居の北西側壁はN-65°-Eの方位をとる。壁は直線的に傾斜しつつ立ち上がり、確認面からの深さは25cmである。ピットは2箇所を確認されているがともに性格は不明である。

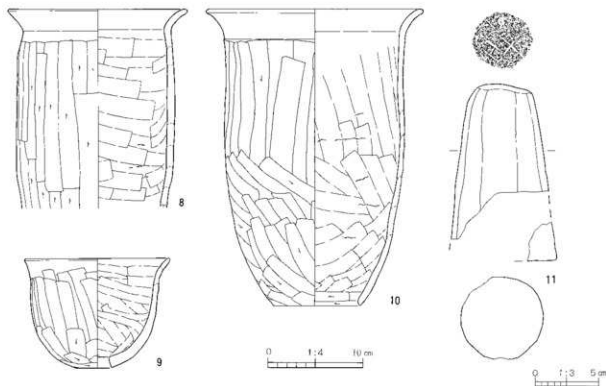
出土遺物は覆土中から土師器片等が比較的多く出土している。遺物の出土状況は床面やや上から上層にかけてであり、本住居廃絶後、これらの遺物は一定の時間幅をもって投棄されたものと推定される。本住居跡の時期は、第51b号住居跡との対応関係や覆土の状態から古墳時代後期と考えられる。



第10図 第51a号住居跡平面・断面図



第11図 第51a号住居跡出土遺物(1)



第12図 第51a号住居跡出土遺物(2)

第2表 第51a号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 杯	A.口縁部径11.7、器高4.0。B.粘土組織み上げ。C.外-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラナデ。D.白色粒、黒色粒、褐色粒、雲母。E.内外面一橙色。F.4/5。H.No.53。覆土、表土。
2	土師器 杯	A.口縁部径13.7、器高4.5。B.粘土組織み上げ。C.外-口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。内-口縁部~体部ヨコナデ。底部ナデ。D.白色粒、褐色粒、石英。E.内外面一橙色。F.1/2。H.一括。
3	土師器 杯	A.口縁部径(13.9)。器高4.8。B.粘土組織み上げ。C.外-口縁部ヨコナデ。体部~底部ヘラケズリ。内-口縁部ヨコナデ。体部~底部ナデ。D.白色粒、褐色粒、雲母。E.内外面一橙色。F.1/4。H.No.77。一括。
4	土師器 鉢	A.口縁部径12.0。器高7.3。B.粘土組織み上げ。C.外-口縁部ヨコナデ。体部~底部ケズリ。内-口縁部ヨコナデ。体部~底部踏ナデ。D.石英、チャート、白色粒、黒色粒。E.内外一橙色。F.完形。H.No.1。
5	土師器 小形甕	A.口縁部径13.4。器高12.3。B.粘土組織み上げ。C.外-口縁部ヨコナデ。胴部~底部ケズリ。内-口縁部ヨコナデ。胴部~底部踏ナデ。D.石英、片岩、白色粒、黒色粒。E.外-にふい橙色、内-にふい黄褐色。F.ほぼ完形。H.覆土、表土。
6	土師器 甕	A.口縁部径(17.8)。B.粘土組織み上げ。C.外-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。内-口縁部ヨコナデ。胴部踏ナデ。D.石英、片岩、白色粒、黒色粒。E.内外-にふい褐色。F.口縁部~胴部1/4。H.No.5・25・31。覆土。
7	土師器 甕	A.口縁部径18.0。B.粘土組織み上げ。C.外-口縁部ヨコナデ。胴部上半ケズリ。内-口縁部ヨコナデ。胴部上半踏ナデ。D.石英、片岩、白色粒、黒色粒。E.内外-にふい褐色。F.口縁部~胴部上半4/5。H.No.3。覆土。
8	土師器 甕	A.口縁部径19.0。器高(21.0)。B.粘土組織み上げ。C.外-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。内-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。D.白色粒、黒色粒、褐色粒、片岩、礫。E.外面一橙色。内面一灰黄褐色。F.口縁部~胴部中位3/5。H.覆土。
9	土師器 小形甕	A.口縁部径15.3。器高11.5。底部径(3.7)。B.粘土組織み上げ。C.外-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。内-口縁部ヨコナデ。胴部踏ナデ。下端ケズリの後ナデ。D.石英、白色粒、褐色粒。E.内外一橙色。F.1/2。H.No.58。覆土。
10	土師器 甕	A.口縁部径(23.0)。器高31.1。底部径9.1。B.粘土組織み上げ。C.外-口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。内-口縁部ヨコナデ。胴部踏ナデ。下端ケズリ。D.石英、片岩、白色粒、黒色粒。E.外-橙色、内-明赤褐色。F.1/3。H.No.40・48・55。甕一括。
11	土師器 土製支脚	A.復元長15.0。底部径6.5。B.手捏ね。C.ナデ。表面は荒れている。D.白色粒、黒色粒、角閃石、礫。E.外面-にふい黄褐色~にふい黄褐色。F.3/5。底部の破片とは接点はないが図上復元。G.被熱により全体的に摩耗している。上面に格子状の圧痕あり。H.No.11。

第51b号住居跡(第13・14図、写真図版3・7)

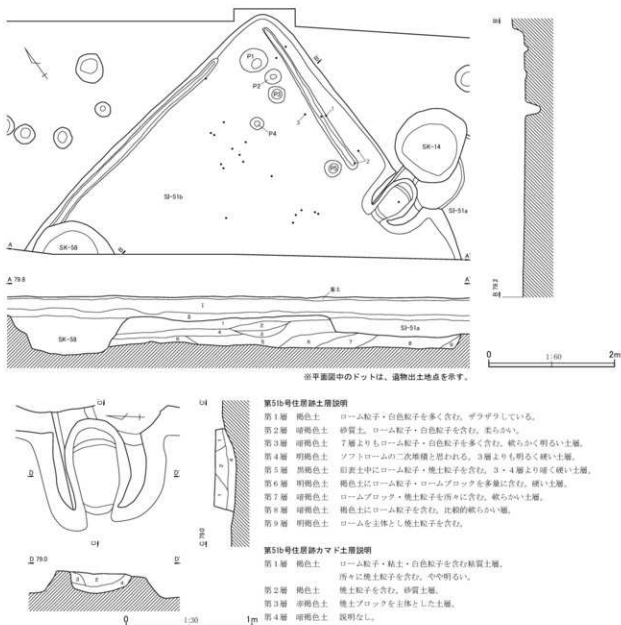
調査区北側に位置し、北西端を第58号土坑に切れ、南部を第51a号住居跡に切られている。住居跡の1/2以上が調査区外のため、遺構の全容は不明である。平面形は調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ方形または長方形を呈しているものと考えられる。規模

第三章 塚島遺跡D地点の調査

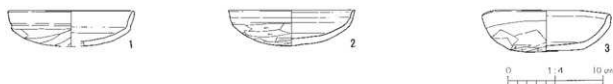
は、北東～南西方向が5.3m、北西～南東方向が5.26mを測る。住居の主軸方位は、 $N-80^{\circ}-E$ をとる。壁は直線的に傾斜しつつ立ち上がり、確認面からの深さは51cmである。壁溝は各壁下に見られるが、北東隅角とカマド両脇は途切れている。幅は12～18cmで深さは5cm程度である。ピットはP1～P5の5箇所で検出されている。P4は直径20cmの円形で、床面からの深さは30cmあり、柱穴の可能性はある。

カマドは、東側壁に位置し、壁に対しほぼ直角に付設されている。第51a号住居に切られており上部が失われているが、規模は、最大長84cm・最大幅101.4cmを測る。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居の壁と一致している。燃焼面(火床)は住居床面よりも若干低く作られている。

出土遺物は、覆土及び床面から土師器が少量出土している。本住居跡の時期は、第51a号住居跡との対応関係や覆土の状態、出土遺物の様相から古墳時代後期と考えられる。



第13図 第51b号住居跡・カマド平面・断面図



第14図 第51b号住居跡出土遺物

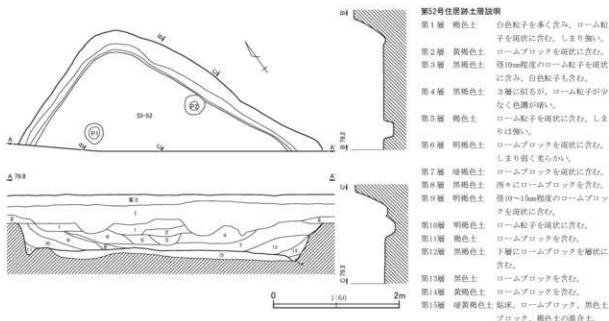
第3表 第51b号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A. 口縁部径13.2、器高3.7、B. 粘土組織み上げ、C. 外-口縁部ヨコナデ、体部~底部ケズリ、内-口縁部ヨコナデ、体部~底部横ナデ、D. 白色粒、黒色粒、E. 外-にぶい赤褐色、内-明赤褐色、F. 1/4、H. №19、
2	土師器 坏	A. 口縁部径13.4、器高3.8、B. 粘土組織み上げ、C. 外-口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ、内-口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ、D. 白色粒、黒色粒、雲母、E. 外面-にぶい赤褐色、内面-にぶい橙色、F. 4/5、H. №20、21、
3	土師器 坏	A. 口縁部径13.6、底径7.9、器高4.3、B. 粘土組織み上げ、C. 外-口縁部ヨコナデ、体部ナデ、体部下位~底部ヘラケズリ、内-口縁部~底部ヨコナデ、D. 白色粒、黒色粒、褐色粒、石英、チャート、E. 内外面-にぶい褐色~にぶい黄褐色、F. 9/10、H. №17、

第52号住居跡 (第15図、写真図版3)

調査区の南側、西壁沿いに位置する。住居跡の2/3が調査区外のため、遺構の全容は不明であるが、E 2 地点の調査で本住居の続きである北西隅角が検出されている。平面形は調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みをもつ方形から長方形を呈しているものと考えられる。規模は、北東~南西方向が3.6m、北西~南東方向が5.9mを測る。住居の主軸方位は不明であるが、住居の北西側壁はN-70°-Eの方位をとる。壁はやや傾斜しつつ立ち上がり、確認面からの深さは40cmである。残存する各壁下には、幅14~20cm・深さ15cmの壁溝が巡っている。床面は、全面ではないが部分的にロームブロックを含む暗黄褐色土で埋め戻した貼床である。ピットは2箇所検出されており、P 1は直径30cmの円形で、床面からの深さは15cmあり、柱穴の可能性がある。

出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、覆土の状態や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。



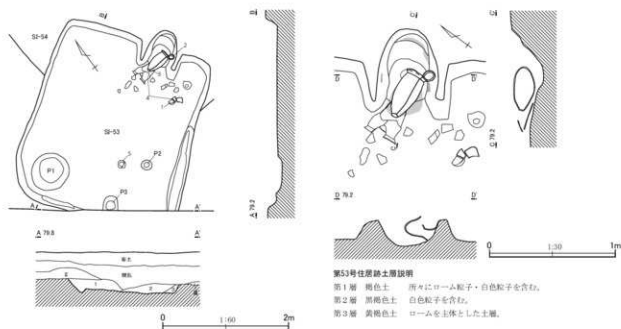
第15図 第52号住居跡平面・断面図

第53号住居跡（第16～18図、写真図版3・4・7）

調査区の南側、西壁沿いに位置し、重複する第54号住居跡を切る。平面形は、コーナー部が丸みを持つ方形を呈している。規模は、北東～南西方向が3m、北西～南東方向が2.7mを測る。住居の主軸方位は、N-55°-Eをとる。壁は直線的に傾斜しつつ立ち上がり、確認面からの深さは14cmある。壁溝は部分的に巡っており、南西・南東壁下には幅14～20cm・深さ15cmの壁溝が巡っている。ピットは3箇所で検出されているが、性格は不明である。

カマドは東壁の中央南寄りに位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は最大長78cm・最大幅73.6cmある。燃焼部は、住居内に位置し、奥壁は住居外に傾斜しながら立ち上がる。内面は非常に良く焼けて赤色化している。燃焼面(火床)は、住居床面より10cmほど低く作られている。

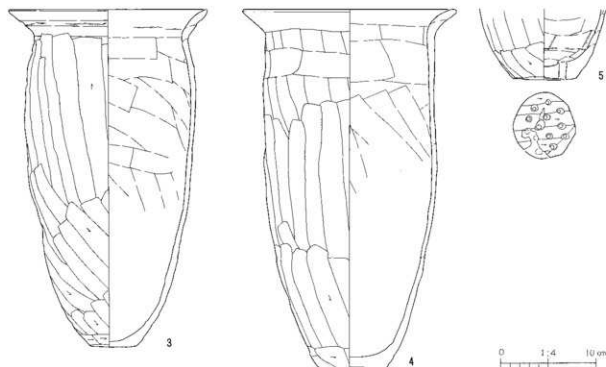
出土遺物は床面付近から、本住居で使用したと思われる土器の破片が比較的多く出土している。カマド内からは、長胴甕が2個体出土している。本住居跡の時期は、覆土の状態や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。



第16図 第53号住居跡・カマド平面・断面図



第17図 第53号住居跡出土遺物（1）



第18図 第53号住居跡出土遺物(2)

第4表 第53号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 坏	A. 口縁部径12.0、器高4.0、B. 粘土組織み上り、C. 外-口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ、内-口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ、D. 白色粒、黒色粒、褐色粒、E. 内外面一橙色、F. 3/4、H. №9、
2	土師器 坏	A. 口縁部径12.2、器高4.2、B. 粘土組織み上り、C. 外-口縁部ヨコナデ、体部~底部ケズリ、内-口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ、D. 石英、片岩、白色粒、黒色粒、E. 内外一橙色、F. ほぼ完形、H. カマド№16、カマド一括、
3	土師器 甕	A. 口縁部径21.0、器高35.8、底部径4.7、B. 粘土組織み上り、C. 外-口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ、底部ナデ、内-口縁部ヨコナデ、胴部~底部踵ナデ、D. 石英、片岩、白色粒、黒色粒、E. 内外一赤褐色、F. ほぼ完形、H. カマド№14・15、
4	土師器 甕	A. 口縁部径22.5、器高38.0、底部径6.7、B. 粘土組織み上り、C. 外-口縁部ヨコナデ、胴部ケズリの後、上位を一部踵ナデ、底部ケズリ、内-口縁部ヨコナデ、胴部~底部踵ナデ、D. 石英、片岩、白色粒、黒色粒、E. 内外一橙色、F. 胴部一部欠損、H. №10、カマド№14、カマド一括、
5	土師器 小形甕	A. 底部径6.6、B. 粘土組織み上り、C. 外-胴部~底部ケズリ、内-胴部~底部ナデ、D. 石英、片岩、白色粒、黒色粒、E. 外-面に黄褐色、内-褐色、F. 胴部下位~底部、G. 底面に外面から内面へ小孔を13ヶ所穿孔、H. №13、

第54号住居跡 (第19~21図、写真図版4・8・9)

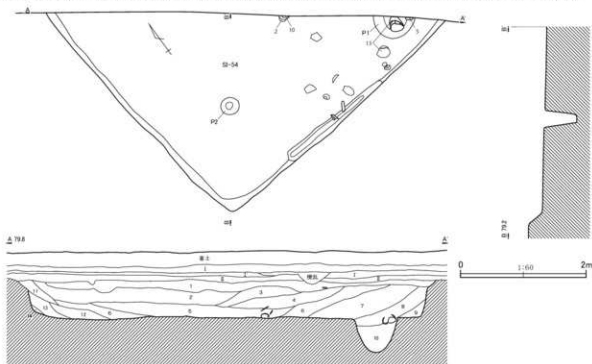
調査区の南側、東壁沿いに位置し、重複する第53号住居跡に切られる。住居跡の2/3が調査区外のため、遺構の全容は不明である。平面形は調査区内で検出された部分から推測すると、方形から長方形を呈しているものと考えられる。規模は、東西方向が4.5m、南北方向が4.3mを測る。住居の主軸方位は、北東側壁にカマドの痕跡が認められることから北東へ東向きと考えられ、南東側壁でN-86°-Eをとる。壁は、直線的に立ち上がり、確認面からの深さは48cmである。床面は、ロームブロックを含む明黄褐色土を埋め戻した貼床である。ピットは2箇所で検出されている。P1は貯蔵穴であり、1/2が調査区外であるが、規模は64×32cm、床面からの深さは55cmを測る。P2は柱穴であり、直径28cm程度の円形で深さは50.1cmである。また、補足調査時に貯蔵穴の左側でもピットが1箇所確認されており、検出位置から柱穴の可能性もある。

カマドは、調査終盤の補足調査により、貯蔵穴の北側で痕跡が認められている。補足調査では、カマドに向かって中央から右側袖を検出しており、カマド内において、長胴甕2点、袖内側付根付近において、小形甕1点、カマド前において、正位の坏1点、袖外側付根付近において坏と小形甕各1点

第三章 塚島遺跡D地点の調査

を検出したとある。

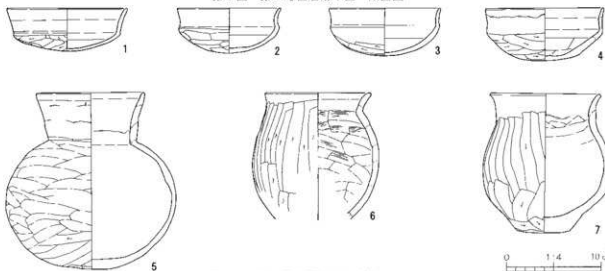
出土遺物は、カマド、貯蔵穴(P1)、床面付近から、本住居で使用したと思われる土器の破片が出土しており、本住居跡の時期は、覆土の状態や出土遺物の様相から、古墳時代後期と考えられる。



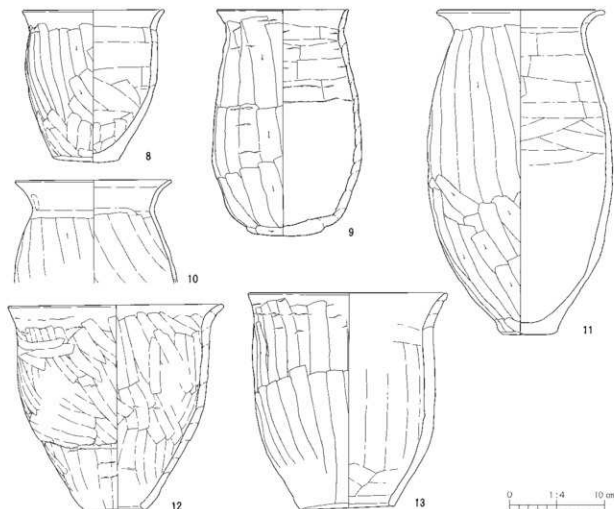
第54号住居跡土層説明

- | | |
|------------|---|
| 第1層 褐色土 | 白色粒子を多く含む、ザラザラした層、しまりは強い。 |
| 第2層 明褐色砂質土 | 柔らかい砂質土。径2～5mm程度のローム粒子を混状に含む、白色粒も若干含む。 |
| 第3層 明褐色土 | ローム粒子を混状に含む、2層よりザラザラした土層。 |
| 第4層 明褐色土 | ローム粒子を混状に含む、3層より柔らかくザラザラしていない土層。 |
| 第5層 暗褐色砂質土 | ローム粒子や褐色土を混状に含む、柔らかい砂質土。 |
| 第6層 暗褐色砂質土 | ローム粒子を混状に含む、柔らかい砂質土。5層より柔らかく明るい層。下部部に焼土・炭化物を含む。 |
| 第7層 褐色土 | ローム粒子を混状に含む、所々にロームブロックを含む。下部部に黒色土を多く含む。 |
| 第8層 黒褐色砂質土 | 砂質土。所々にローム粒子を含む。 |
| 第9層 明褐色土 | ロームブロックを主体とした土層。 |
| 第10層 黒色土 | バラバラした土層。 |
| 第11層 黒色砂質土 | 砂質土。ローム粒子・白色粒子を所々に含む。 |
| 第12層 褐色土 | ローム粒子を所々に含む。 |
| 第13層 黒褐色土 | ローム粒子を含む黒色土。所々に径5mm程度のローム粒子を含む。 |

第19図 第54号住居跡平面・断面図



第20図 第54号住居跡出土遺物(1)



第21図 第54号住居跡出土遺物(2)

第5表 第54号住居跡出土遺物観察表

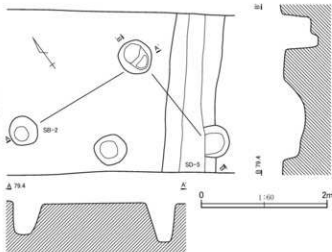
1	土師器 坏	A.口縁部径12.7、器高4.5、B.粘土組織み上げ、C.外-口縁部ヨコナデ、体部~底部ケズリ、内-口縁部ヨコナデ、体部~底部踏ナゲ、D.石英、白色粒、黒色粒、E.内外-橙色、F.ほぼ完形、H.カマド。
2	土師器 坏	A.口縁部径10.9、器高4.8、B.粘土組織み上げ、C.外-口縁部ヨコナデ、体部~底部ケズリ、内-口縁部ヨコナデ、体部~底部踏ナゲ、D.白色粒、褐色粒、E.内外-橙色、F.口縁部1/2欠損、H.No.3。
3	土師器 坏	A.口縁部径(11.9)、器高5.1、B.粘土組織み上げ、C.外-口縁部ヨコナデ、体部~底部ハラケズリ、内-口縁部~体部ヨコナデ、底部ナゲ、D.白色粒、褐色粒、雲母、E.内外面-橙色、F.2/5、H.カマド。
4	土師器 坏	A.口縁部径12.4、器高5.6、B.粘土組織み上げ、C.外-口縁部ヨコナデ、体部~底部ケズリ、内-口縁部ヨコナデ、体部~底部踏ナゲ、D.石英、雲母、白色粒、褐色粒、E.内外-明赤褐色、F.完形、H.カマド。
5	土師器 直口壺	A.口縁部径11.3、器高18.7、B.粘土組織み上げ、C.外-口縁部ヨコナデ、胴部~底部ケズリの後、胴部上~中位踏ナゲ、内-口縁部ヨコナデ、胴部~底部踏ナゲ、D.石英、片岩、白色粒、黒色粒、E.内外-橙色、F.口縁部1/3、胴部一部欠損、H.No.5。
6	土師器 小形甕	A.口縁部径11.3、器高(13.3)、B.粘土組織み上げ、C.外-口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内-口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケナゲ、D.白色粒、角閃石、石英、E.外面-にぶい赤褐色、内面-灰褐色、F.口縁部~胴部下位3/4、H.カマド。
7	土師器 小形甕	A.口縁部径11.7、器高4.7、底部径5.5、B.粘土組織み上げ、C.外-口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ、底部ナゲ、内-口縁部ヨコナデ、胴部~底部踏ナゲ、D.石英、片岩、白色粒、黒色粒、E.外-明赤褐色、内-黄灰色、F.完形、G.内面胴部下位~底部は器表面が剥離、H.カマド。
8	土師器 小形甕	A.口縁部径15.0、器高16.2、底部径7.0、B.粘土組織み上げ、C.外-口縁部ヨコナデ、胴部ケズリの後、下位踏ナゲ、底部ナゲ、内-口縁部ヨコナデ、胴部~底部踏ナゲ、D.石英、白色粒、黒色粒、E.内外-にぶい赤褐色、F.口縁部・胴部一部欠損、H.カマド。
9	土師器 甕	A.口縁部径13.9、器高24.0、底部径8.0、B.粘土組織み上げ、C.外-口縁部ヨコナデ、胴部~底部ケズリ、内-口縁部ヨコナデ、胴部~底部踏ナゲ、D.石英、片岩、白色粒、黒色粒、褐色粒、E.内外-橙色、F.ほぼ完形、G.内面胴部下位~底部は器表面が剥離、器形は樽内状に至む、H.カマド、覆土一括。

10	土師器 甕	A.口縁部径16.6, B.粘土総積み上げ, C.外-口縁部ヨコナデ, 胴部上位ケズリ, 内-口縁部ヨコナデ, 胴部上位蓋ナデ, D.石英, 白色粒, 褐色粒, E.外-一橙色, 内-にぶい黄橙色, F.口縁部~胴部上位, H.No.3,
11	土師器 甕	A.口縁部径17.7, 器高24.5, 底部径5.5, B.粘土総積み上げ, C.外-口縁部ヨコナデ, 胴部ケズリ, 底部ナデ, 内-口縁部ヨコナデ, 胴部~底部蓋ナデ, D.石英, 片岩, 白色粒, 黒色粒, E.内外-橙色, F.胴部1/4欠損, H.カマド,
12	土師器 甕	A.口縁部径(22.8), 器高21.6, 底部径(6.6), B.粘土総積み上げ, C.外-口縁部ヨコナデ, 胴部蓋ナデ, 内-口縁部ヨコナデ, 胴部蓋ナデ, 下部部ケズリ, D.石英, 片岩, 白色粒, 褐色粒, E.外-にぶい赤褐色, 内-灰褐色, F.3/4, H.貯蔵穴,
13	土師器 甕	A.口縁部径(21.3), 器高22.9, 底部径10.0, B.粘土総積み上げ, C.外-口縁部ヨコナデ, 胴部ケズリ, 内-口縁部ヨコナデ, 胴部蓋ナデ, 下部部ケズリ, D.石英, 白色粒, 黒色粒, E.外-にぶい褐色, 内-褐色, F.口縁部3/4・胴部1/4欠損, H.No.4・6,

2. 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡(第22図、写真図版4)

調査区の中央に位置し、柱穴の1つは第5号溝跡と重複する。規模は、東西方向が2.2m、南北方向が1.9mを測る。また、遺物として真間期の坏が出土しており、本遺構の時期は奈良時代頃と推定される。

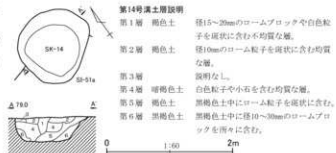


第22図 第2号掘立柱建物平面・断面図

3. 土坑

第14号土坑(第23図、写真図版4)

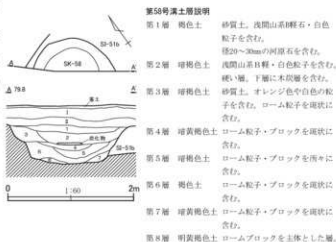
調査区の北側に位置し、重複する第51a号住居跡北隅角を切る。平面形は116×108cmを測り、歪な円形を呈する。壁はやや丸みを帯びて立ち上がる。確認面からの深さは38.8cmである。出土遺物は少なく、時期は不明である。



第23図 第14号土坑平面・断面図

第58号土坑(第24図)

調査区の北側の北側に位置し、重複する第51b号住居跡の北西部を切る。南半は調査区外であるが、平面形は131.2×53.0cmを測り、円形または楕円形を呈すると考えられる。壁は傾斜して立ち上がる。確認面からの深さは60.6cmである。出土遺物は少ないが、浅間山系A軽石を含まず浅間山系B軽石が確認されたことから時期は平安時代以前と推定される。

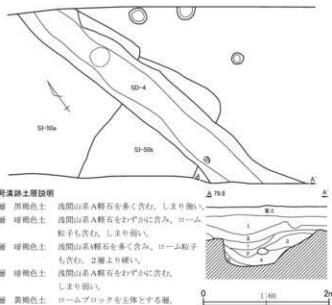


第24図 第58号土坑平面・断面図

4. 溝跡

第4号溝跡 (第25図、写真図版4)

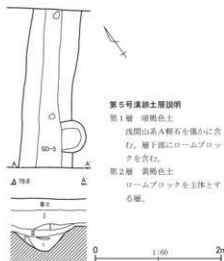
調査区北側に位置し、重複する第50a・50b号住居跡を切る。調査区内では、北から南方向に向いて直線的な流路をとる。規模は溝の上端が幅70～78cm、下端が幅32.5～49cmを測る。一部崩落しているが、断面の形態は逆台形を呈し、確認面からの深さは26～53cmである。遺物は覆土中から僅かに出土しているが、遺構に伴うものはない。本遺構の時期は、全体に浅間山系A軽石を含むことから、近世後半以降と考えられる。



第25図 第4号溝跡平面・断面図

第5号溝跡 (第26図、写真図版4)

調査区の中央に位置し、第2号掘立柱建物跡と重複する。調査区内では北東から南西方向に向けて直線的な流路をとり、D地点の南西側に位置するE地点2区でも、本溝跡の延長部が検出されている。規模は上端が幅75～81cm、下端が幅27～41cmを測る。断面の形態は逆三角に近い逆台形であり、底面は平坦である。壁は直線的に傾斜し、深さは確認面から26～32cmある。本遺構の時期は、覆土中に浅間山系A軽石を含むことから、近世後半以降と考えられる。

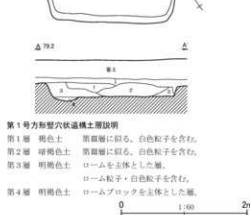


第26図 第5号溝跡平面・断面図

5. 方形竪穴状遺構

第1号方形竪穴状遺構 (第27図、写真図版4)

調査区の中央東壁寄りに位置する。本遺構の北東側は調査区外のため、全容は不明である。平面形は検出された部分から推測すると、コーナー部が丸みを持つ方形または長方形を呈しているものと考えられる。規模は、北東～南西方向が0.87m、北西～南東方向が2.06mある。壁は直線的にやや傾斜しながら立ち上がる。確認面からの深さは36cmである。床面は、地山ロームを直接掘り窪めて整形した直床式で、全体的には平坦に作られている。本遺構は、その構造や形態から見て、中世の方形竪穴状遺構であると考えられる。



第27図 第1号方形竪穴状遺構平面・断面図

第IV章 徳万谷附遺跡の調査

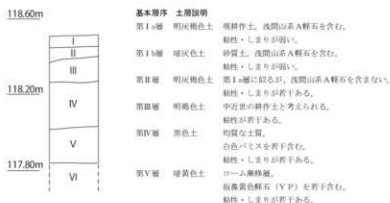
第1節 遺跡の概要

徳万谷附遺跡は、旧児玉町の農道改良舗装工事に伴って発掘調査を実施したものである。本遺跡は、上武山地より北東方向に延びる児玉丘陵の一支丘上、南縁辺部に位置する。本遺跡が立地する丘陵は、北西側に幅約250mの比較的広い平坦部を有し、標高は120m前後を測る。西側の丘陵部は縄文時代から中世まで多くの遺跡に恵まれており、代表的なものとして弥生時代～古墳時代の再葬墓・方形周溝墓が検出された前組羽根倉遺跡（児玉郡神川町）や縄文時代前期の集落が検出された宮内上ノ原遺跡等が所在している。また、北～東側にかけて弥生～古墳時代の神川22号遺跡（児玉郡神川町）が接しており、現在は市町境で分断されているが、古墳時代において同一の集落であった可能性が考えられる。南側の緩やかな小谷を挟んだ対岸には縄文時代～中世までの複合遺跡である真鏡寺後遺跡が、更に南側には児玉党の塩谷氏居館跡と考えられている真鏡寺館跡がある。

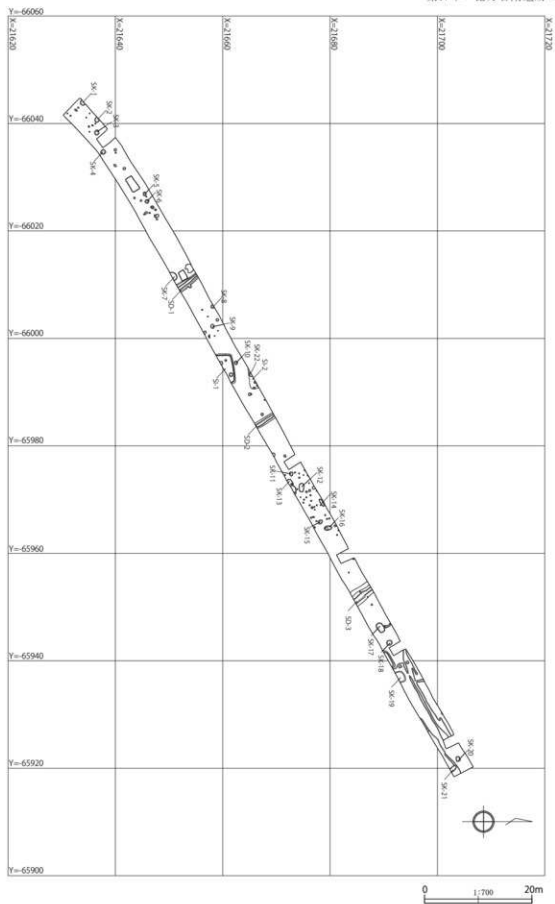
今回の発掘調査において検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、中近世の墓壇を含む土坑22基、古代から近世の溝跡3条である。竪穴住居跡は遺構に伴う遺物がなく、時期の比定には困難を有するものの、調査時の所見や覆土の堆積状況から、古墳時代の遺構であると考えられる。土坑は、遺物が少なく、時期や性格が推定できるものは少ないが、第21・22号土坑は遺構の構造や形態及び覆土の状況から中近世の墓壇と推定される。溝跡は遺構に伴う遺物がなく、周囲に同時期の遺構もないため、時期や性格に不明な部分があるが、調査時の所見や覆土の状況から、それぞれに時期を異にした古代から近世の遺構であると考えられる。

第2節 基本層序

今回の調査では第3号溝跡南壁面をもとに基本層序の観察を行っている。調査区は南西から北東にかけて緩やかに傾斜し、調査区北東部は南西部より3m程度低い。表土である第I層は、浅間山系A軽石（天明3年：1783年）を含む層であり、地点により第I a層と第I b層に分かれる。第II層は、浅間山系A軽石降下以前の堆積層である。第III層は、中世～近世にかけての耕作土である。第IV層は、黒色土で白色バミス若干含む均質な層である。第V層は、ローム層との漸移層となっており、板鼻黄色軽石（YP）を若干含む。第VI層は、黒色土で白色バミス若干含む均質な層である。



第28図 徳万谷附遺跡 基本層序概略図



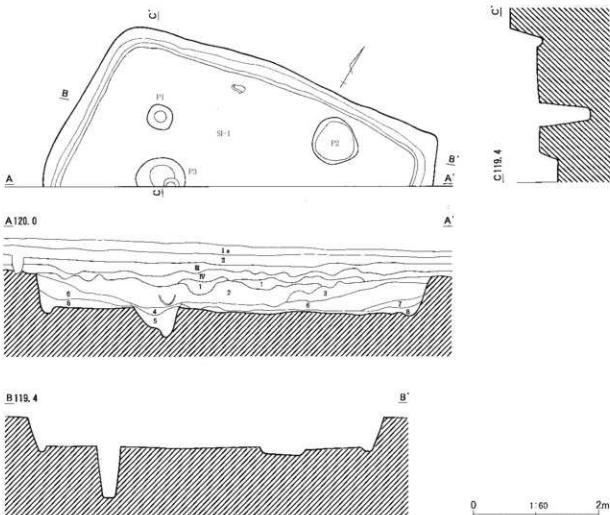
第29図 徳万谷附遺跡調査区全測図

第3節 検出された遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

第1号住居跡（第30・31図、写真図版11・12）

調査区の中央やや南に位置しP3に切られる。住居跡の2/3が調査区外のため、遺構の全容は不明である。平面形は残存する部分から推定すると、コーナー部が丸みを持つ方形から長方形を呈しているものと考えられる。規模は、東西方向が5.4m、南北方向が2.76mを測る。住居の主軸方位は不明であるが、検出された北壁を基準にすれば、N-86°-Wの方位をとる。壁は直線状にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは62cmである。各壁下には幅15~24cm、深さ4~12cmの壁溝が巡



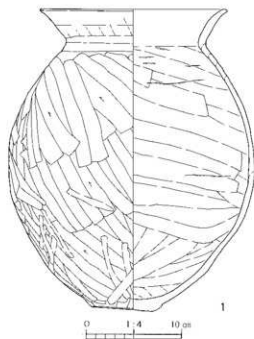
第1号住居跡土層説明

- 第1層 黒色土 黄色粘を若干含む、粘性・しまりが若干ある。
- 第2層 黒色土 第1層に似るが、黄色粘の含有量が少ない。
- 第3層 黒色土 均質な土層、粘性・しまりがある。
- 第4層 黒色土 径1mm程度のローム粒を多量に含む、粘性・しまりが強い（P3層土）。
- 第5層 暗黄色土 径1~5mm程度のローム粒を多量に含む、粘性・しまりが強い（P3層土）。
- 第6層 暗褐色土 白色バクスを若干含む、粘性・しまりがある。
- 第7層 暗褐色土 径10~30mmのロームブロックを多く含む暗黄色土を面状に含む、粘性・しまりがある。
- 第8層 暗黄色土 径10~30mmのロームブロックを多く含む、粘性・しまりがある。

第30図 第1号住居跡平面・断面図

る。ピットは3箇所で見出されている。P1は柱穴であり、直径40cmの円形を呈し、床面からの深さは80.5cmである。

出土遺物は、土師器の甕が1点出土している。住居廃絶後、覆土の埋没がやや進行した段階でP3が掘り込まれ、その埋没後に土師器の甕が投棄されていた。本住居跡の時期は、覆土の状態やP3との切り合い関係、出土遺物の様相から、古墳時代中期以前と推定される。



第31図 第1号住居跡出土遺物

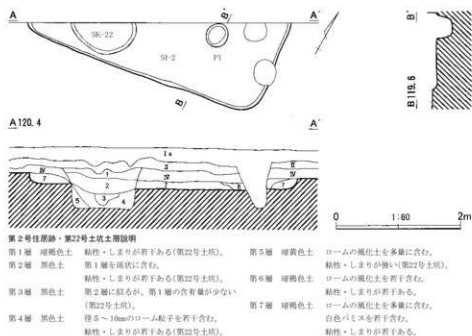
第6表 第1号住居跡出土遺物観察表

1	土師器 甕	A. 口縁部径19.7、器高32.0、底部径6.4。B. 粘土紐積み上げ。C. 外-口縁部踏ナゲの後ヨコナゲ。胴部ケズリの後一部踏ナゲ。底部ナゲ。内-口縁部ヨコナゲ。胴部-底部踏ナゲ。D. 石莖、白色紋。E. 内外-褐色。F. 口縁部1/4欠損。H. №1。
---	----------	---

第2号住居跡 (第32図、写真図版11)

調査区の中央やや南に位置し、北西部を中近世の所産と推定される第22号土坑に切られる。住居跡の3/4が調査区外のため、遺構の全容は不明である。平面形は残存する部分から推定すると、コーナー部が丸みを持つ方形から長方形を呈しているものと考えられる。規模は、東西方向が3.8m、南北方向が1.6mを測る。住居の主軸方位は不明であるが、南壁を基準にすれば、N-81°-Wの方位をとる。床は東にやや傾斜して下がり東端では西端より9cm程度下がる。壁は直線状にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは11cmである。ピットは1箇所で見出されている。P1は柱穴であり、直径36cmの円形を呈し、床面からの深さは22.9cmである。

出土遺物は、覆土中から土器の破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、出土遺物や覆土の状態、周囲の調査成果に基づく調査所見から、詳細な比定はし得ないが古墳時代と推定される。



第32図 第2号住居跡・第22号土坑平面・断面図

2. 土坑

第1号土坑 (第33図)

調査区の南西隅に位置する。遺構の北西側は調査区外に位置するため土坑の全容は不明である。平面形は楕円形を呈している。規模は、北東～南西方向が103cm、北西～南東方向が68cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15.1～20cmである。底面は広く、平坦な面が南東側に傾斜する。出土遺物はなく、時期は不明である。

第2号土坑 (第33図)

調査区の南西に位置する。遺構の北西側は調査区外に位置するため土坑の全容は不明である。平面形は楕円形を呈していると推定される。規模は、北東～南西方向が85cm、北西～南東方向が80cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは11.5cmである。底面は広く、平坦である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第3号土坑 (第33図)

調査区の南西に位置する。平面形は楕円形を呈している。規模は、東西方向が100cm、南北方向が82cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは16cmである。底面は広く、平坦な面である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第4号土坑 (第33図)

調査区の南西に位置する。平面形は方形寄りの不整形を呈している。規模は、北東～南西方向が78cm、北西～南東方向が80cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは24cmである。底面は広く、平坦な面である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第5号土坑 (第33図)

調査区の南西に位置する。平面形は楕円形を呈している。規模は、北東～南西方向が70.5cm、北西～南東方向が60cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20.5cmである。底面は広く、平坦な面である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第6号土坑 (第33図)

調査区の南西に位置する。平面形は円形を呈している。規模は、東西方向が80cm、南北方向が71cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmである。底面は広く、平坦な面である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第7号土坑 (第33図、写真図版11)

調査区の南西に位置する。遺構の北西側は調査区外に位置するため土坑の全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈していると推定される。規模は、北東～南西方向が164cm、北西～南東方向が98cmを測る。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは29cmである。底面は広く、平坦な面である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第8号土坑 (第33図)

調査区の南西に位置する。遺構の北西側は調査区外に位置するため土坑の全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈していると推定される。規模は、北東～南西方向が61cm、北西～南東方向が76cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは32.5cmである。底面は広く、平坦な面である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第9号土坑 (第33図)

調査区の南西に位置する。平面形は円形寄りの不整形を呈している。規模は、東西方向が79cm、南北方向が66cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは31cmである。底面は広く、平坦な面である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第10号土坑 (第33図)

調査区の中央南寄りに位置する。平面形は方形寄りの不整形を呈している。規模は、北東～南西方向が66cm、北西～南東方向が55cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは23.5cmである。底面は広く、平坦な面である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第11号土坑 (第33図)

調査区の中央南寄りに位置する。平面形は円形寄りの不整形を呈している。規模は、東西方向が83.5cm、南北方向が70cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは27cmである。底面は広く、平坦な面である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第12号土坑 (第33図、写真図版11)

調査区の中央に位置する。平面形は円形寄りの不整形を呈している。規模は、東西方向が168cm、南北方向が80cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは37cmである。底面は広く、平坦な面である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第13号土坑 (第33図)

調査区の中央南寄りに位置する。遺構の南側は調査区外に位置するため土坑の全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈していると推定される。規模は、北東～南西方向が139cm、北西～南東方向が70cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは35cmである。底面は広く、平坦な面である。ピットは1箇所検出されており、直径35cmの円形を呈し、底面からの深さは60.2cmある。本土坑の時期は、覆土の状態から、中世以前の所産と考えられる。

第14号土坑 (第34図)

調査区の中央に位置する。平面形は楕円形を呈している。規模は、北東～南西方向が153cm、北西～南東方向が51cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは9cmである。底面は広く、平坦な面である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第15号土坑 (第34図)

調査区の中央北寄りに位置する。平面形は楕円形を呈している。規模は、北東～南西方向が70cm、北西～南東方向が86cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmである。底面は広く、平坦な面が南東側に傾斜する。出土遺物はなく、時期は不明である。

第16号土坑 (第34図、写真図版11)

調査区の中央北寄りに位置し、南側は後世のピットに切られている。平面形は楕円形を呈している。規模は、東西方向が80cm、南北方向が151cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは31.1cmである。底面は広く、平坦である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第17号土坑 (第34図、写真図版11)

調査区の北側に位置する。平面形は楕円形を呈している。規模は、東西方向が189cm、南北方向が120cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは38cmである。底面は広く、平坦である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第18号土坑 (第34図)

調査区の北側に位置する。平面形は円形を呈している。規模は、東西方向が60cm、南北方向が64cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmである。底面は広く、平坦である。出土遺物はなく、時期は不明である。

第19号土坑（第34図）

調査区の北側に位置する。遺構の南側は調査区外に位置するため土坑の全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈していると推定される。規模は、北東～南西方向が219cm、北西～南東方向が127cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは36cmである。底面は広く、中央部がやや高く縁へ傾斜する。出土遺物はなく、時期は不明である。

第20号土坑（第34図）

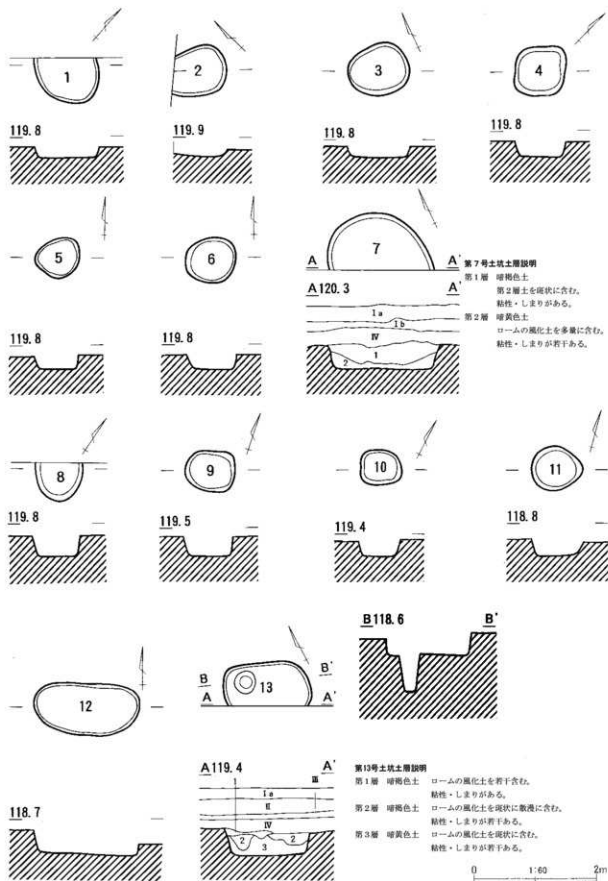
調査区の北側に位置する。平面形はコーナー一部が丸みを帯びた長方形寄りの不整形を呈している。規模は、東西方向が101cm、南北方向が77cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは14cmである。底面は広く、中央部がやや高く縁へ傾斜する。出土遺物はなく、時期は不明である。

第21号土坑（第34図、写真図版11）

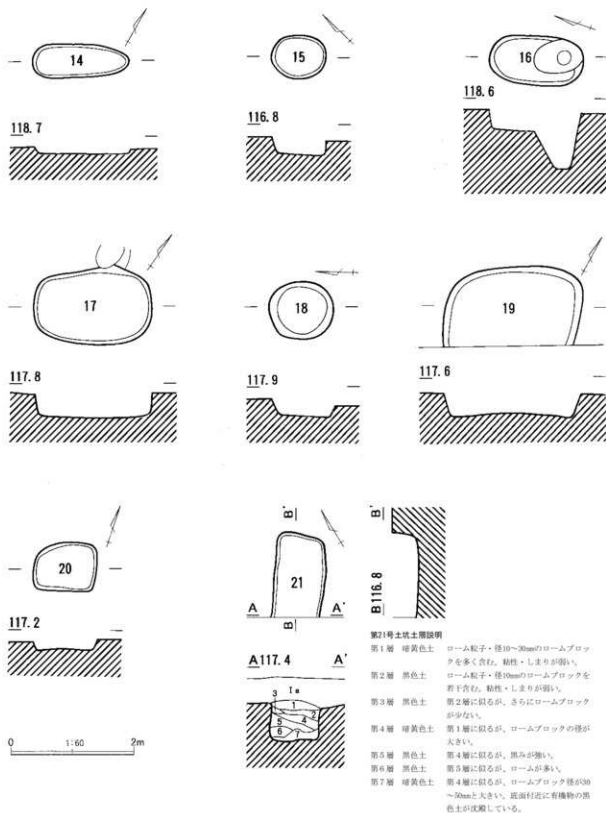
調査区の北側に位置する。遺構の南側は調査区外に位置するため土坑の全容は不明であるが、平面形は長方形を呈していると推定される。規模は北東～南西方向が80cm、北西～南東方向が136cmを測る。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは43.5cmである。底面は広く、平坦である。出土遺物はなく、時期の決め手に欠けるが、遺構の構造や形態及び覆土の状況、覆土下層に存在する有機物層から、本土坑は中近世の墓壇であると推定される。

第22号土坑（第32図）

調査区の中央やや南に位置し、第2号住居跡の北西部を切る。遺構の北側は調査区外に位置するため土坑の全容は不明であるが、円形または楕円形を呈していると推定される。規模は、東西方向が100cm、南北方向が47cmを測る。壁は直角に立ち上がった後、中央で傾斜が緩くなり立ち上がる。第IV層から掘り込まれており、第IV層からの深さは62cmで、底面は平坦である。出土遺物はなく、時期の決め手に欠けるが、遺構の構造や形態及び覆土の状況に基づき調査所見から第21号土坑と同様に墓壇の可能性が推定される。



第33図 第1～13号土坑平面・断面図



第34図 第14～21号土坑平面・断面図

3. 溝跡

第1号溝跡 (第35図、写真図版12)

調査区の南西に位置する。調査区内では北西から南東に向けて直線的な流路をとっている。複数回の掘り直しを行っており、掘り直し後は中央部分が1段低く掘り下げられている。規模は、溝の上端が幅104～162cm、掘り直し前と推定される下端が幅60～130cmを測る。新たに掘削された旧溝跡底部中央部分の掘り込みは上端が幅40～64cm、下端が幅21～40cmを測る。溝幅は北西から南東に向けて次第に広がる。断面の形態は中央部に掘り込みをもつ逆台形を呈し、底面は面ごとにそれぞれ平坦である。確認面からの深さは掘り直し前の底面で76cm、掘り直し後の掘り込み底面で104cmである。

遺構に伴う出土遺物はなく、時期や性格の決め手に欠けるが、掘り直し前の埋没土である第9層の様相から、本遺構は中近世の所産であると推定される。

第2号溝跡 (第35図、写真図版12)

調査区の中央に位置する。調査区内では北西から南東に向けて直線的な流路をとっている。規模は、上端が幅116～124cm、中端が幅32～64cm、下端が幅22～36cmを測る。底面を2面もつことから掘り直しを行っている可能性がある。下層の底面は平坦であるが、上位の底面は丸味をもって立ち上がる。確認面からの深さは、それぞれ56cm、64cmである。

遺構に伴う出土遺物はなく、時期や性格の決め手に欠けるが、浅間山系A軽石を含まない第II層下に位置することから、本遺構は中近世の所産と考えられる。

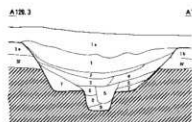
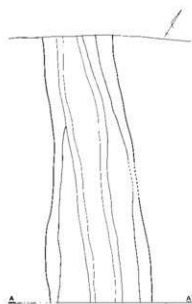
第3号溝跡 (第36図、写真図版12)

調査区の北側に位置する。調査区内では調査区内では北西から南東に向けて直線的な流路をとっている。規模は、上端が幅156～214cm、中端が幅62～104cm、下端が幅44～79cmを測る。溝幅は北西から南東に向けて次第に広がる。壁の立ち上がりは中央部分で傾斜が変わり、上側の方が傾斜が緩い。確認面からの深さは96cmである。

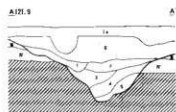
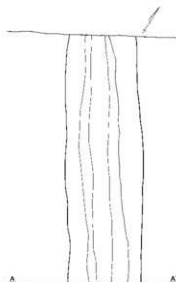
遺構に伴う出土遺物はない。本遺構の時期は、中近世の耕作土である第III層下にあり、覆土中に浅間山系B軽石を含むことから平安時代以前の可能性がある。覆土の堆積状況から、人為的な埋め戻しを行っている可能性が想定されるが、溝跡はそれぞれに時期差があり、他に同時期の遺構・遺物が検出されていないため、詳細は不明である。

4. 遺構外遺物 (第37図、写真図版12)

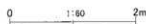
遺構外において、須恵器と打製石斧が検出されている。いずれも第2号溝跡近くで検出されているが、時期的な関連性はない。須恵器は口縁部片2点を含む破片3点、打製石斧は完形1点である。



SD-1



SD-2



第1号溝跡土層説明

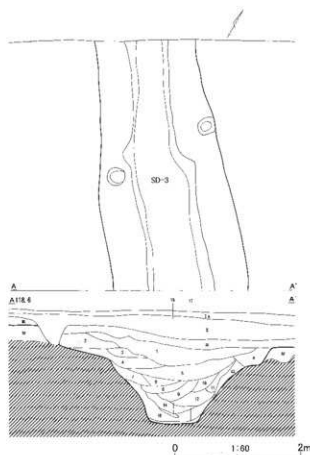
- 第1層 暗褐色土 浅間山系A軽石を多く含む。粘性・しまりが若干ある。
- 第2層 黒色土 径1mm程度の炭化物粒を疎らに含む。粘性・しまりがある。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を底状に含む。粘性・しまりが若干ある。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を若干含む。粘性・しまりが若干ある。
- 第5層 暗褐色土 白色パミスおよび黄色和を若干含む均質な土。
- 第6層 暗褐色土 第5層に似るが、やや不均質で色調がやや暗い。粘性・しまりがある。
- 第7層 暗褐色土 第5層土を底状に含む。粘性・しまりがある。
- 第8層 暗褐色土 径1mm程度のローム粒を多量に含む。
- 第9層 暗褐色土 粘性・しまりがある。
- 第9層 暗黄色土 ロームの風化土を多く含む。粘性・しまりがある。

第2号溝跡土層説明

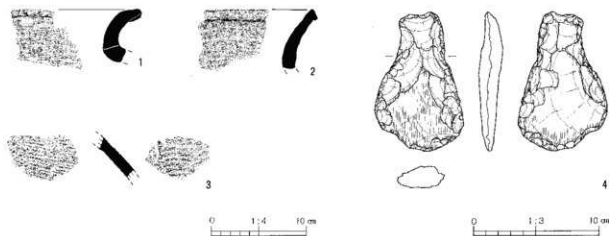
- 第1層 暗褐色土 粘性・しまりが若干ある。
- 第2層 暗褐色土 第1層に似るが、よりしまっており、緻密である。第1層より色調やや暗い。
- 第3層 褐色土 第2層土の風化土を底状に含む。粘性・しまりが若干ある。
- 第4層 暗褐色土 白色パミスを若干含む。粘性・しまりが若干ある。
- 第5層 暗黄色土 ロームの風化土を多く含む。粘性・しまりが無い。

第35図 第1・2号溝跡平面・断面図

第IV章 徳万谷附遺跡の調査



第36図 第3号溝跡平面・断面図



第37図 遺構外出土遺物

第7表 遺構外出土遺物観察表

1	須恵器 甕	B.ロクロ成型。C.外-ロクロナデ。内-ロクロナデ。D.白色粒・黒色粒。E.内外-灰色。G.口縁部破片。還元焼成。口縁部は外反する。
2	須恵器 甕	B.ロクロ成型。C.外-ロクロナデ。内-ロクロナデ。D.白色粒・黒色粒。E.内外-灰色。G.口縁部破片。還元焼成。口縁部は外反する。
3	須恵器 甕	B.タタキ成型。C.外-平行タタキ。内-当て具痕。D.白色粒。E.内外-灰色。G.胴部破片。還元焼成。
4	石部 打製石斧	長さ11.05、幅7.1、厚さ1.95、重さ118.55g。石材、頁岩。調整、剥片の両側縁部に直接打撃による両面加工。使用痕、刃部周辺に顕著な摩耗痕あり。

第3号溝跡土層説明

- 第1層 礫状褐色土
ローム粒子・浅間山系日軽石を若干含む。
粘性・しまりがある。
- 第2層 礫状褐色土
第1層に似るが、ローム粒子・浅間山系日軽石の含有量が少ない。色調やや暗い。粘性・しまりがある。
- 第3層 礫褐色土
硬くしまった硬化面があり、運路状遺構の可能性がある。
粘性が若干あり、強くしまっている。
- 第4層 礫褐色土
径1~2mm程度のローム粒子を多く含む。浅間山系日軽石を若干含む。粘性・しまりがある。
- 第5層 黒色土
有機質層。径1mmくらいのローム粒子・浅間山系日軽石を若干含む。
- 第6層 黒色土
第5層に似るが径10~20mmのロームブロックを多く含む。
- 第7層 礫褐色土
径1mm程度のローム粒子・浅間山系日軽石を若干含む。粘性・しまりがある。
- 第8層 黒色土
第5層に似るが、ローム粒子・浅間山系日軽石等の含有量が若干少ない。
- 第9層 礫褐色土
第6層に似るが、径10~20mmのロームブロックを含まない。
- 第10層 礫褐色土
ローム粒子・浅間山系日軽石を若干含む。
粘性・しまりが若干ある。
- 第11層 礫黄色土
第V層土の風化土をかなり含む。粘性・しまりが若干ある。
- 第12層 礫褐色土
径1~2mmのローム粒を含む。粘性・しまりが若干ある。
- 第13層 礫黄色土
第11層に似るが、第V層土の風化土を多量に含む。粘性・しまりがある。
- 第14層 礫褐色土
第12層に似るが、よりしまっており、均質である。
粘性・しまりがある。
- 第15層 黒色土
有機質層。径1~2mmのローム粒子を若干含む。
粘性・しまりがある。
- 第16層 礫褐色土
径1~20mmのローム粒子・ロームブロックを多く含む。粘性・しまりがある。
- 第17層 礫褐色土
径10~50mmのロームブロックを多量に含む。粘性・しまりが非常に強い。

第V章 まとめ

第1節 塚島遺跡D地点

塚島遺跡は、本庄台地の縁辺に占地する。これまでにA地点～F地点まで計6地点で調査が実施されており、すでにA・C・E・F地点の報告がまとめられている。検出された遺構は、D地点を含め、竪穴住居跡81軒、掘立柱建物跡2軒、土坑58基、溝跡10条、井戸跡1基、方形竪穴状遺構4基であり、古墳時代を中心に、縄文時代、鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。

本遺跡の主体となる時期は古墳時代であり、女堀川流域における大規模開発の影響を強く受け、4世紀後半の古墳時代前期から古墳時代後期の6世紀代にかけて長期的に集落が営まれている。また、『塚島遺跡Ⅲ』（恋河内2008b）では、E地点における土師器の編年が編まれ、『塚島遺跡Ⅳ』（恋河内2012）では、C地点における時系列的な集落の様相が分析されており、塚島遺跡を検討する上で重要な示唆を与えている。

さて、D地点は、空間的にまとまりのあるC～F地点（第3図）の最も北側に位置し、竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡1軒、土坑2基、溝跡2条、方形竪穴状遺構1基が検出されている。

検出された竪穴住居跡は、時期が不明瞭な住居もあるが、概ね6～7世紀前半の古墳時代後期の住居と推定される。また、出土遺物から、これらの住居間にはある程度の時期差があることが認められた。D地点は住居跡が密集する東側の調査地点に比べ住居数は少なく、やや閑散とした様相から集落の中心から離れた地点であったと考えられる。

これまでの調査成果から塚島遺跡の竪穴住居跡は、7世紀前半頃を境に見られなくなる傾向にあるが、D地点の様相も同様であった。女堀川流域周辺では7世紀半ばに集落の再編成が起きており、この影響を受けて、塚島遺跡の古墳時代集落も廃絶・移転したものと考えられる。

また、中世の遺構について、本地点で方形竪穴状遺構の検出が1基あり、E地点で住居跡として報告されたものを合わせ、4基となった。本地点で時期を特定する遺物は検出されていないが、E地点で検出された土器類は13世紀後半に位置付けられており（恋河内2008b）、隣接する本地点も同時期の遺構の可能性が高い。また、本遺跡北東に位置する古井戸遺跡、内手遺跡からは、13・14世紀頃と考えられる館跡（井上1986、鈴木1995）が検出されており、時期的に何らかの関連する遺構である可能性が高い。しかし、これらを検討するには資料が不足しており、今後の資料の増加・整理の進展に期待したい。

第2節 徳万谷附遺跡

徳万谷附遺跡は、児玉丘陵東端にある小支丘上に占地する。隣接する児玉郡神川町の神川22号遺跡とは市町境により分断されているが、古墳時代において一連の遺跡であった可能性が高い。また、緩やかな小谷を挟んだ南側には弥生時代～中世までの複合遺跡である真鏡寺後遺跡が立地しており、古墳時代の住居跡が多数発見されている。

さて、本調査では竪穴住居跡2軒、溝跡3条、土坑22基が検出されている。遺物の検出は僅かであり、周辺の遺跡で豊富に出土する縄文時代の遺構・遺物は打製石斧を除き、検出されていない。

検出された竪穴住居跡は、2軒とも古墳時代の住居跡と推定される。同時代の住居跡は、小谷を挟

第V章 まとめ

んで南側に所在する真鏡寺後遺跡で多く検出されている。真鏡寺後遺跡及び周辺遺跡の古墳時代住居跡の分布状況については『真鏡寺後遺跡Ⅲ』（恋河内1991）が詳しい。これによれば、古墳時代の集落遺跡は丘陵上の平坦部に分布し、徳万谷附遺跡の南東側の対岸に中期の集落城が、南側の対岸に後期の集落城が時期ごとにまとまりをもって所在する。

徳万谷附遺跡で検出された住居跡について、真鏡寺後遺跡の集落縁辺部の可能性もあるが、真鏡寺後遺跡周辺の発掘状況から児玉郡神川町側の平坦部や丘陵の付根部、北～西側の未調査部に、集落城が広がる可能性も考えられる。現状では明言を避け、今後の調査に期待したい。

<参考文献>

児玉町文化財調査報告書

鈴木徳雄1987『真鏡寺後遺跡Ⅰ』第7集

大屋道則1987『真鏡寺後遺跡Ⅱ』第8集

鈴木徳雄1989a「第V章 古代児玉郡の開発と真下大溝」『真下廃東遺跡』第9集

恋河内昭彦1991『真鏡寺後遺跡Ⅲ』第14集

大屋道則1991「第V章 塚島遺跡および児玉条里の調査」『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』第15集

鈴木徳雄1991「第VI章 古代児玉郡における集落設営の計画性」『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』第15集

鈴木徳雄1995「第VIII章 古代児玉郡の土地利用と方形館の成立」

『堀向・藤塚A・柿島・内手B・C・児玉条里遺跡』第18集

鈴木徳雄1997「第V章 古代児玉郡の灌漑と地域圏」『金佐奈C・児玉条里遺跡上田地区』第25集

児玉町遺跡調査会報告書

恋河内昭彦1995『南共和遺跡・新宮遺跡』第6・7集

鈴木徳雄 2000「第VI章 児玉丘陵における集落城と墓域」『塩谷下大塚遺跡』第10集

松澤浩一2005『宮内上ノ原遺跡』第18集

本庄市遺跡調査会報告書

恋河内昭彦2008a『塚島遺跡Ⅱ』第22集

恋河内昭彦2008b『塚島遺跡Ⅲ』第23集

恋河内昭彦2012『塚島遺跡Ⅳ』第33集

児玉町史料調査報告

鈴木徳雄1989b「解説 四、「九郷用水」の開発年代」『九郷用水関係資料集』第12集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書

井上尚明 他1986『将軍塚・古井戸Ⅰ』第64集

岩瀬謙1988「IV調査成果のまとめ 4. 将監塚・古井戸遺跡の大溝について」『将監塚・古井戸Ⅱ』第71集

その他

埼玉県教育委員会1992『平成2年度 埼玉県埋蔵文化財調査年報』

埼玉県教育委員会1993『平成3年度 埼玉県埋蔵文化財調査年報』

前組羽根倉遺跡調査団1996『埼玉県前組羽根倉遺跡発掘調査報告書』

恋河内昭彦1992「児玉地方における弥生時代の概観」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要』

写真図版



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



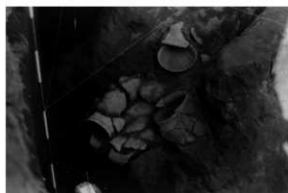
第49号住居跡



第49号住居跡遺物出土状況



第49号住居跡カマド



第49号住居跡カマド遺物出土状況



第49号住居跡貯蔵穴



第49号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



第50a・50b号住居跡



第51a・51b号住居跡



第51a号住居跡遺物出土状況



第51b号住居跡遺物出土状況



第51b号住居跡カマド



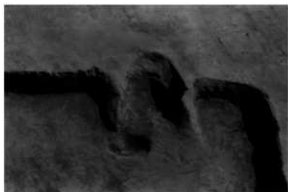
第52号住居跡



第53号住居跡



第53号住居跡遺物出土状況



第53号住居跡カマド



第53号住居跡カマド遺物出土状況



第54号住居跡



第54号住居跡遺物出土状況



第4号溝



第5号溝・第2号掘立柱建物跡



第14号土坑

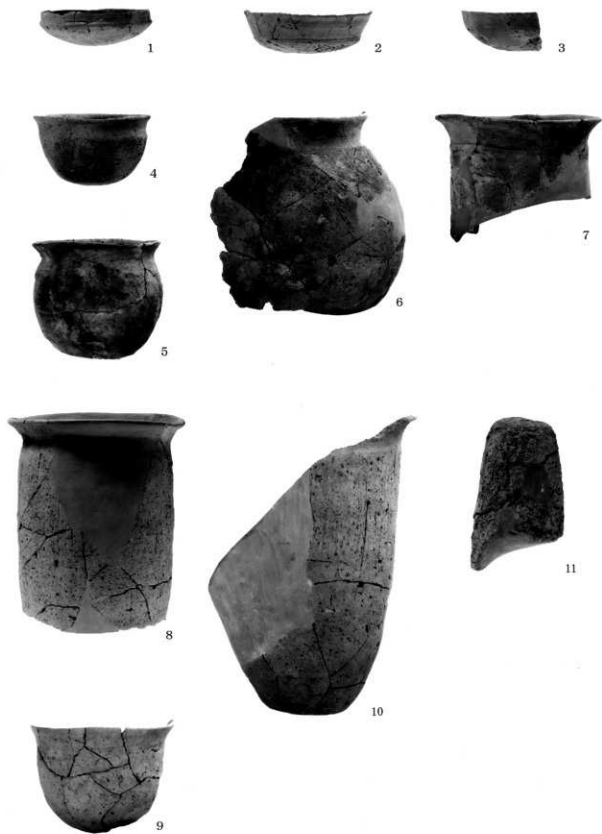


第1号方形竪穴状遺構



第49号住居跡出土遺物

塚畠遺跡D地点遺物写真(1)



第51a号住居跡出土遺物



第51b号住居跡出土遺物



第53号住居跡出土遺物



1



2



3



4



5



6



7



8



9

第54号住居跡出土遺物 1



第54号住居跡出土遺物2



調査区全景（南西から）



調査区全景（北東から）

徳万谷附遺跡調査区全景写真



第1号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡



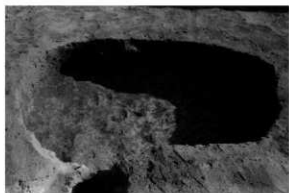
第7号土坑



第12号土坑



第16号土坑



第17号土坑



第21号土坑



第1号溝跡



第2号溝跡



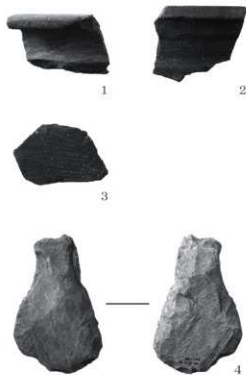
第3号溝跡

徳万谷附遺跡遺構写真(2)



1

第1号住居跡出土遺物



1

2

3

4

遺構外出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ツカバタケイセキ5-Dチデンノチョウサー、トクマンヤツイセキ							
書名	塚高遺跡V-D地点の調査一、徳万谷附遺跡							
副書名								
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書	巻次	第64集					
編著者	大熊季広・福岡佑斗							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 ℡0495-25-1185							
発行日	西暦2021年(令和3年)3月31日							
フリガナ	フリガナ	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡(度分秒)	(度分秒)				
塚高遺跡 D地点	本庄市児玉町共栄 字南共和 330 外	112119	54-028	36°12'50"	139°08'13"	19900728 ～ 19900929	200 m ²	町道改良
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡8軒・掘立柱建物跡1基・土坑2基・溝跡2条・方形竪穴状遺構1基		土師器			
フリガナ	フリガナ	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡(度分秒)	(度分秒)				
徳万谷附遺跡	本庄市児玉町宮内 字徳万谷附 1400 外	112119	54-106	36°11'35"	139°05'58"	19911111 ～ 19920128	690 m ²	農道改良
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡2軒・土坑22基・溝跡3条		土師器・須恵器・石器			

本庄市埋蔵文化財調査報告書第64集

塚 畠 遺 跡 V

—D地点の調査—

徳万谷附遺跡

令和3年3月29日 印刷

令和3年3月29日 発行

発行／本庄市教育委員会

埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

印刷／山進社印刷株式会社

埼玉県本庄市本庄3丁目3番36号